ウィーン小景

寺　邑　昭　信

はじめに

まず、研究論文とはいいがたい雑稿を、『人文学科論集』に投稿することのお許しを請うとともに、掲載の機会を与えていたことに深く感謝いたしたい。

筆者はこれまで曽遊の地ウィーンに関する様々な文献を集めてきたが、ドイツ語、邦語のものを合わせてかなりの数になってしまった。その一部は講義などでも活用したが、大半は書架あるいは段ボール箱の中で休眠状態にある。今回、来年以降『人文学科論集』への投稿資格を失うこともあって、それらのうちのいくつかを寝覚めさせたいとの気持ちから、専門外の分野ということは承知のうえで、また大半が先行研究の紹介のようなものでありウィーン文化史研究への何の寄与もなしえない内容であることに忸怩たる思いをしつつ本稿を執筆することとなった。各節に共通のテーマないし動機がなくもないのだが、一応それぞれの節は独立した体裁なので、読者はどの小景から読まれても自由である。またそのほかの風景も描きたかったのであるが、紙幅を大幅に超過したこともあり、割愛することにする。

本稿は、基本的には筆者の一昔前の色あせた記憶をもとにしているため、かつ貧弱な語学能力も相俟って、不正確な点が多々あろうかと懸念している。読者のご指摘･ご教示ならびにご叱責を切に請う次第である。

なお研究論文とは異なる体裁の本稿の性格上、厳密な引用の提示などは割愛したことも予めお詫びしておきたい。また人名、地名などの表記に関しては、たとえばドナウ河→ドーナウ河、ハプスブルク家→ハープスブルク家のように、なるべくドイツ語の原音に近い表記を用いるよう心がけた。ただし、

ウィーン（本当は奥舌円唇音､つまり口をすぼめて発する母音［u］ではなく、唇歯有声摩擦音、下唇に歯を当てて調音する子音［v］)、オーストリア（正式国名は Österreich エーステライヒ）については、慣用にしたがった。また関連する図版、写真については、末尾に一括して掲げた。

1. Die Spinnerin am Kreuz シュピンネリン・アム・クロイツ 十字架の紡ぎ女

昔、ウィーンの友人から縦10センチ、横16センチほどの古いオリジナルの彩色銅版画をもらったことがあった（図１)。1850年ころの作品で、作者は A.A.Schmidl もしくは G.A.Schmmer となっている。表題は「ウィーンの全眺望」とあり、まだ人家もない郊外の高台からウィーンの旧市内を俯瞰したものである。構図は下から三分の一付近に地平線があり、その上に水平に旧市内が広がっており、中心部にはシュテファン大聖堂が確認できる。前景は何もないなだらかに旧市内へ下る草地であり、ウィーンのほうから街道が左手へと続いており、馬車が二台、コーチ風の一台は停止、荷馬車らしきもう一台は土埃をあげてウィーン方向に向かっている。右手には馬上の人物が二人、左手には立派な身なりの男女が数名立っている。そしてそのすぐ後ろに細長く高い尖塔が聳えている。この尖塔全体を絵に収めるために、地平線が低く、空が大きくとってあることが分かる。主題となる尖塔が左端に置かれているにもかかわらず、視線がこの尖塔から穏やかにウィーン旧市内の方へ傾斜していくような安定した構図である。当初は、この絵がどこからの眺めなのか、あまり気にならずそのまましまっておいた。

ところがしばらくして、ドイツ語のウィーン観光案内書で同じような形の尖塔の写真を目にする機会があった。ウィーン10区、トリエステ通りに面した Spinnerin am Kreuz だという。そこで、もう一度銅版画を取り出してよくよく見たところ、表題の下に小さく「シュピンネリン・アム・クロイツから見た」とあって、この絵が現存する尖塔の近くからの光景描写であること

が判明した。また、19世紀前半、この尖塔は当時のウィーンの名所の一つとして風景画の好まれた主題となっていたようで、同工の絵が他にも多くあることも分かった。たとえば筆者所有の19世紀前半のウィーンの名所図絵集の中の絵では、構図は真ん中に大きく尖塔を描いたものとなっているが、この絵でも遠景にウィーン旧市内が描かれており、当時この場所はウィーン旧市内を眺望するのに格好の場所であったようである。

この尖塔であるが、日本語のウィーン観光案内書ではほとんど目にすることはないが、ドイツ語の類書にはその記載は普通であり、そこからおおよそ以下のようなことが分かる。

高さ16㍍のこの尖塔は、かつてのウィーン市の南端、ヴィーナーベルク（ウィーン山）の頂付近にあり、1375年マイスター・クナープの建てたという最初の塔が1446年にハンガリー勢により破壊されたため、1451年から52年にかけてシュテファン聖堂建築頭であるハンス・プフスバウムが再建したものであり、古くからウィーンのシンボルとなっている。その後トルコ軍による損壊などを受けてたびたび修理が加えられている。またこの塔を「十字架の紡ぎ女」と呼ぶわけは、十字軍遠征からの夫の帰還をこの場所で糸を紡ぎながら（spinnen）長いこと待ち続け、蓄えたお金を尖塔建造のために寄進したという貞淑な女性の伝説によるものだという。またこの尖塔の正式名はCrispinus-Kreutz であるという記述も見られる。またこの塔のすぐ近くには（1747年までと、一時移動して再び1804年から68年まで）公開処刑場があったことにも大方の案内書は触れている。

もう一昔になるが、二回目のウィーン長期滞在のおり、一度この尖塔を見てみたくなり、足を運んだことがあった。

この石造りの十字架像のあるウィーン行政区の第10区は、区内を南北に走る幹線道路ファヴォリーテン通りにちなんで「ファヴォリーテン」と呼ばれる。（ファヴォリーテンは、３区にあった17世紀後半建設のハープスブルク家の夏の離宮 Favorita に由来する。ファヴォリータはその後、外交官研修所テレジアーヌムなど変転を経て、ギムナジウムになっている。）この区は

現在でこそウィーン一番の人口稠密地帯であるが、かつてはウィーンの遙か郊外だった。1704年、長年、ハンガリーの反乱に悩まされたウィーンには、オイゲン公の進言で旧市内の城壁のさらに外側に旧市内 InnerStadt と市外 Vorstadt を更に囲む環濠城壁 Linienwall（市外壁とも訳される、1893年に取り壊され、現在のギュルテルがその一部の名残である）がめぐらされたが、この地区はさらにその郊外 Vorort に位置していた。

尋ねたのは１月、年明けからしばらく降雪の無かった時期である。アパート近くのヴィドナーハウプトシュトラッセから65番のバスに乗ってマッツラインスドルフ広場下車、ガードをくぐり抜ける。ここは環濠城壁の門の一つマッツラインスドルフ門があったところであり、この地点から昔の環濠城壁の外、南に向かってトリエステ街道が始まる。左手には、テオフィル・ハンセン設計のネオ・ビザンチン様式のどこか東洋的な雰囲気を持つ福音教会およびその墓地がある。南の方向へ徒歩で街道を下る、というよりここからは緩やかな登り坂になっている。街道の右手には1920年代の末に建てられた巨大な集合住宅、ジョージーワシントンホーフの一角が見える。この通り一体は、全体として賑やかなギュルテルの内側と違い、何となく裏寂れたような印象を受ける。ただし車の往来は激しい。密集した建物に妨げられてはいるが、振り返ると例の銅版画のように市内中心部がある程度眺望できる。思ったほどの距離はなく、途中不思議な形の塔（有名なファヴォリーテン給水塔だった）に寄り道したにもかかわらず10分ほどで Spinnerin am Kreuz に到着した。もう傾きかけた冬の弱い陽光を浴びながら高く薄青い空を背景にやや黄味を帯びた白っぽい塔がまっすぐに立っていた。周囲により高い建物ができているせいか思ったより低く感じられたが、たぶんライタ岩を使っているのか明るい色のそして同じ年代の市内のマリア・アム・ゲシュターデ教会とどこか似通った繊細さを感じさせる塔だった。勿論尖塔の頂には十字架が据えられているが、よく見ると台座自体が厚めの十字形をしていて、各々の角からそれぞれ二本、合計八本の細長い柱が延びていて、そこから本体の飛び控えが天蓋とつながっている。それらの柱が囲む空間は上部がアーチ状の

窓になっていて、その内部（龕）にはキリストの受難を表す彫像（南側は「荊冠のイエス」、東側は「見よ，人なり」、西側は「鞭打ち」、北側は「磔刑」）が彫り込まれており、その上に細長い天蓋がさらに尖塔へと連続している。旧市内への眺望は、銅版画のようにはいかなかったものの、まぎれもなく（勿論何度も修復を経ているというが）あの絵中のそれと同じ尖塔だった。建立時からの時間、そして絵に記録された時からの時間、そして今の時間、その厚みを感じつつ、尖塔を後にした。

以下、なぜ、この石柱が「Spinnerin am Kreuz」ないし「Crispinus-Kreutz」と呼ばれるのか、またなぜこの場所に、このような尖塔が据えられているのかという疑問を中心として、多少調べてみたことを述べることにする。

まず尖塔が面しているトリエステ通りであるが、この通り（というより街道というほうが適当であろう）は、その名前からも分かるように（トリエステはかつてはアドリア海に面するハープスブルク帝国の軍港であった）旧市の城門ケルントナー門から発し、南へ向かう昔からの幹線道路であり、現在、国道17号線としてヴィーナーノイシュタット、グラーツを経てゼンメリングに通じている。その存在は古くローマ時代に遡り、パンノニアのローマ軍駐屯地とハンガリーの現在のショプロンを結んでいたという。その古道の一部も先述の福音教会近くで発掘されており、また小尖塔から約二キロほど南にあるインツァースドルフやさらに先のヴェーゼンドルフでは、ローマ時代の里程標が見つかっている。その後12世紀から13世紀にかけてケルンテン通りとトリエステ通りが整備され、すでにゼンメリンへの部分区間ができていたという記録があるという。以上からも、この通りが古く、しかもウィーン市に取り非常に重要な道路の一つだったことが分かる。

ところで、この道は小尖塔に向かって上り坂になっており、そこからウィーン市内を見晴るかすことができるのは、すでに彩色銅版画の描くとおりであるが、この小尖塔のある場所は、上述のようにヴィーナーベルクの頂上付近である。ヴィーナーベルク（ベルク＝山）といっても海抜244㍍（236㍍という記述もある）の高さで、しかもここはヴィーナーベルク段丘（テラス）の

頂とはいえ、一帯が平坦になっている。トリエステ通りはここまでが上り坂で、あとは南へと下っていく（南斜面一帯は、現在ではヴィーナーベルク公園の緑地である）。旧ウィーン市内の海抜がおよそ150～160㍍ほどであるから、標高差は100㍍に満たないとはいえ、旧市内を眺望するには、しかもあたりに住居などがなかった時代にはなおさらのこと、十分な高さである。手元の1788年89年の古地図（Opll［4］図32、33））は、どちらも郊外も含めてウィーンを鳥瞰したものであるが、その中では人家もまばらなこの地帯は、影をつけて小山のように立体的に描かれていて、当時の地形を彷彿させるが、その頂上にはちゃんと小尖塔も見える。いずれにしても小尖塔のある一帯は、無人地帯であり、かなり特異な場所であったように思われる。

その特異な点に関していえば、中世、ここは、ウィーンの城内（都市）平和 Burgfried（私闘、Fehde を禁ずる司法権）の及ぶ境界であり、小尖塔は境界石の意味を持っていたという説があるが、それついては後ほど述べることにして、ここでは市の城内平和の境界に関連して、古くから近くにあったという処刑場について少し触れておきたい。

中世、絞首台の作りは公権のシンボル（cf.「リューベックのそれは五本の石柱で造られていて、高さが二十メートルあった。パリでは、モンフォーコンの丘に十六本の石柱で築かれた建造物に常時十六人までの死人がぶらさがっていた。」プレティヒャ（4）162頁）でもあったということから、ウィーン市の絞首台も、かなり立派な（?）作りではなかったかと推測されるが、現在その跡形もない。ただし、絞首台を描いた古い絵が残されている。

それは、1529年のトルコ軍のウィーン攻略の際の陣地を描いたバルテル・ベハムの絵である。その中にはヴィーナーベルクのさらに南側からウィーン方向に広がる沢山のテントからなるトルコ軍陣地が描かれているが、その上部にはトルコ人が陵辱する小尖塔が、そしてその右手に死体がぶら下がった絞首刑台が見える。それは、柱が四本台座から伸びている高い絞首台であり、一梁に４人ほどが吊されており、その規模がうかがえる。なおこの地での処刑執行は1868年が最後で、刑場はその後移転する（1927年には先述のジョー

ジ・ワシントンホーフの建設に際して多数の首のくくれた遺体が発掘されたという)。また1827年の強盗殺人の罪で死罪となったゼヴェリン・フォン・ヤロシンスキーの絞首刑の際には、２万とも３万ともいわれる観衆が集まったという。その数は差し引いても、当時、この一帯は人家もない草地であったことが確認できよう。(なお田口は、「ところで、産業的近代が近代的な工場地帯と貧しい労働者の世界を生み出しつつあったファヴォリーテン（10区）には、1850年以来シュピンネリン･アム･クロイツに処刑場が設けられていた」((3) 77頁）と述べているが、これは正確ではない。ただし、田口は、続けて、1868年以降の公開処刑廃止について、当時の自由主義政府の決定によるものであるとし「死刑の公開という野蛮な前近代の具現的公共性から、言論･議会による近代市民的公共性への移行を示す象徴的事例と考えることができよう」(同頁）と卓見を述べている。)

ウィーンには、そのほかにも刑場があったが、このヴィーナーベルクの処刑場は、人家から離れたしかも高台ということで、絞首刑にはうってつけの場所であったようである。またこうした中世の絞首刑場のロケーションについては、次の阿部謹也の説明も参考になろう。

「絞首した死体はそのまま吊しておき、風に吹かれるままにし、烏のついばむにまかせるのである。古来絞首台の絵に、必ず烏が登場するのも烏が供犠としての絞首の儀式に重要な役割を果たしていたからである。死体の上も下も風が通り抜けるようにしなければならない。死体を風がゆり動かすようにしなければならなかった。･･･都市では場所がなかったから家に囲まれた広場に作られたが、原則として青空の下でなければならなかった。最も好まれたのが小高い丘の上か岸辺であった。また絞首台は北に向けて立てねばならなかった。だから絞首台のことを北向きの木ともいったのである。

また地面から離して高く吊すことにも意味があった。何故なら大地と接触すると大地から魔力が流れ込むと考えられていた。」(文献(1))「刑吏の社会史」著作集第二巻44頁)

この文に続けて阿部は、なぜ絞首台が風の通り抜ける青空の下、小高い丘

や海辺に置かれるかの理由について、古代ゲルマン社会における絞首が、風（すべてを運び去り浄化する恐ろしい自然の力）の神であり、死に神、死者の導き手でもあるヴォータンへ供物であったからとするフォン・アミラの説を紹介している。（同書45頁参照）

実際、ヴィーナーベルクは、市外の小高い目立った丘であり、しかもラーベルク（本稿４「ラーの森とベーメン人のプラーター」参照）と並んで、風の強い一帯であることからまさにヴィーンの「絞首台山」、いわばゴルゴタの丘（カルヴァリオの丘、ドイツ語では Kalvarienberg）として格好の場所であったわけである。（なおキリストの受難を追体験させる受難の道行きについてはローマのサンジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂のサンタ・サンクトールムの階段が有名であるというが、ウィーンにはバロック時代に建てられたカルヴァーリエンベルク教会が９区にある。18世紀末描かれた絵では、教会の両脇が上り下りの階段になっていてその先の高台には磔刑のキリストが見られる。）

さて、問題の小尖塔の建設意図および名前の由来についての話しに進もう。まず、設計者であるが、「ウィーンの都市史研究論攷」第21巻『ウィーンのシュピンネリン・アム・クロイツ』所収のダーム著「シュピンネリン・アム・クロイツの歴史」（[5] ９頁以下）によればこの小尖塔の建設が1451年から52年であることは、1836年にシュラーガーによって、ウィーン市の当時の出納帳の記録をもとに明らかにされた。またウィーン市の委託により、当時シュテファン聖堂の建築頭で未完に終わった北塔の設計者でもあったハンス・プフスバウム（1390年以前の生まれで1454年死亡）の指揮下、聖堂建築組合によって建てられたことも分かっている。（cf. ダーム「シュピンネリン・アム・クロイツの歴史　先行者－建立－修復」[5] 12頁以下。）

プフスバウムについては、シュテファン大聖堂についての浩瀚な研究書を著したフォイヒトミュラーによれば（フォイヒトミュラー [6] 171頁）、1410年代後半の遍歴時代ウルムの建築組合で修業を積みんだことが記録されてい

るものの、20年代既にウィーンの建築組合で働いていたかどうか、またパルリエ（親方の補佐役となる伝令ないし石工頭）として活動していたのかは定かでないという。彼は1439年にはシュタイエルの教区教会の新築に携わり、またそのころ既にシュテファン聖堂の設計に加わっていたというが、1446年になって前任のシュテファン聖堂建築頭プラハニッツの跡を襲い建築頭となった。

「プフスバウムは非常に多面的であり、かつ様々な領域で活躍した。彼は長堂の形を決定し、教会に天井をかぶせ、入り口ホール（ジンガー門）と切妻、祭壇天蓋と大きな西の二階席を作成した。第二の塔に対する自身の原案により、完成していた南塔との競争にさえ至った。」（フォイヒトミュラー「6」171頁）

現在アドラー塔と呼ばれる北塔は、1444年に最初の礎石が置かれたものの一旦覆われ、プフスバウムが建築頭であった1450年に第二の礎石が置かれた。その礎石の上に塔の建築が始まったのは1467年である。しかしこの建築作業は1511年に途中までで中止となる。（ちなみに今日シュテッフェルの愛称で呼ばれる南塔は、建造開始が1359年、完成は1433年である。）この建設中止に関しては、周知のようにプフスバウムにまつわ有名な伝説が残されている。すなわちプフスバウムは石工頭の娘マリーアに恋したが、結婚の条件は一年以内に北塔を完成させるという不可能事だった。そこでプフスバウムは（ファウスト博士的モティーフであるが）悪魔と契約を結んだが、条件は聖人の名前を絶対に口にしてはならないということだった。ところがある日マリーアが建築現場に現れたので、彼は彼女の名前を呼んでしまった。すると足場が崩れてプフスバウムは転落死してしまったという。

もちろん教会および塔の建設は何世代もかかる大事業であり、プフスバウムは北塔の本格的建設以前に世を去っているわけで、建築中止の本当の理由はウィーン市の財政難であったといわれる。今日、高さ137㍍の南塔だけが聳えているが、北塔が未完に終わったため、孤高の南塔はかえってウィーン旧市内の他に類のないランドマークとなっているともいえるのである。ちなみ

に10区には、彼の名にちなんだプフスバウム小路がある。

次に小尖塔の名前の由来であるが、以下、研究史の間接的紹介というやや問題のある形でではあるが、先述の『ウィーンのシュピンネリン・アム・クロイツ』所収のダームの研究論文「シュピンネリン・アム・クロイツ　伝説と諸解釈」（[5] 85頁以下）に主として依拠して見ていくこととする。この論文は、小尖塔についてのこれまでの（1803年に始まり19世紀前半に集中している）研究成果を踏まえながら、名前の由来、建設の意図についての諸説に批判的に検討を加えたものである。

まず明らかなのは、この小尖塔は建築当初からシュピンネリン・アム・クロイツと呼ばれていたのではないことである。初めは、類似の石柱と同様、「十字架」「彫像石柱」「受難の柱」、さらに他の場所と区別するために「マイトリング（現在のウィーン12区マイトリング･･･筆者注）のヴィーナーベルクの十字架」「刑場の傍の十字架」と呼ばれていたことが15世紀後半から17世紀前半の資料によって確認されているという。

それに対して、今日のシュピンネリン・アム・クロイツという名称（の原型）は18世紀の間に徐々に定着していくのだが、それが文献上初めて確認されるのは、1709年、ウィーン市長と市参事会がこの石柱の修復に関して下オーストリア政府に当てた書状の草案、および市の行政部局に発せられた布告であるという。それらには「俗に Creutz-Spinnerin と呼ばれているヴィーナーベルクの彫像石柱」とあり、このことから17世紀から18世紀への変わり目頃から「受難の石柱」「十字架」という官庁での表現のほかに、「Spinnerin」が付加されて使われ出したことが分かる。またその後 Spinnerin (Creutz), Spine Kreutz, Spinnerkreutz, Spinen Kreutz といった表記も用いられている。
（先ほど触れた1788年の古地図では Spiner Kreuz、また89年の地図には Spinen Kreutz が確認できる。[4] 図32、図33）

さらに Spinnerin am Kreuz という名称が初めて文献上確認されるのは1803年である。以後、この名称が今日に至るまで広く通用するようになっていく。

ダームによれば、この新しい名前に関する研究は、1803年から1836年の短期間に集中して行われたが、1803年に同時に三つの論文が論文がこの名前について触れているという。詳細については割愛するが、それらの論文に述べられた小尖塔の由来についての言い伝えは、以下のようなものである。

(1) 尖塔の建設者は Spinner という名前だったので、尖塔は Spinner-Kreutz と呼ばれた。

(2) 尖塔は立派な靴職人の親方によって建てられ、このツンフトの守護聖人、聖 Crispinus に献げられた。

(3) 無実の罪で、この刑場で処刑されそうになった靴職人が、疑いが晴れて刑を免れた感謝の念でこの尖塔を造らせた。

さらに別の言い伝えによると、Crispin Pöllizer という名の敬虔な男が、それまで木製の十字架のあった場所に受難の十字架の尖塔と双子の聖人、聖クリスピヌスとクリスピアヌスの彫像を建てさせたという。彼の名前のCrispin の cris が省略され、spinus、spiner Kreuz と変わり最後に Spinnerin Kreutz となったというのである。

ダームによれば、1807年にこれらの伝説のそれぞれに反論したゴイザウは、この尖塔についての現在まで伝えられている主要な伝説の原型（糸紡ぎにより得た収益で石柱を立てさせた女の話）、そして上の（3）の靴職人の名前が Spinner であるという言い伝えにも言及し、これらの言い伝えも退けた。結局ゴイザウの結論は、この石柱の成立と命名については誰も知らないというものだった。（既に触れたように、この小尖塔の作者はプフスバウムと判明しており、その成立の問題は解決済みなのだが、19世紀初めにはまだその事実が明らかになっていなかったわけである。）

そのうえでゴイザウは、他の石柱との比較を行ない、ウィーンの石柱は14世紀ないし15世紀に遡ると考え、命名の問題について三つの推測を行っている。（ダーム［5］91頁）

(1) 尖塔の地理的位置によるもの、ここがいくつかの道の交差する場所であることから、「蜘蛛の巣の中心にいる蜘蛛 Spinne」を思い起こさせる。

(2) 発音の変化によるもの、Das Wiener Kreutz は Swienerkreuz に縮合されること、15世紀には Wはしばしば B と表記されたこと、そこで(da) S wiener Kreuz が Sbinnerkreuz を経て、Spinner-kreuz へ、最終的には Spinnerin am Kreuz と変化したと推定できるのではないかとする。

(3) この石柱の形態から、ヴィーナーベルクの十字架は、下から見上げると蜘蛛のように見えるから、色々な形の十字架がそれぞれ固有のニックネームを持つように、ヴィーナーベルクの十字架も「Spinnerin am Kreuz」と呼ばれてしかるべきではないかというもの。

ゴイザウ以後の研究者は、彼の説を手がかりに研究を進めていくことになる。

(なおこれはゴイザウの所説ではないが、他に、尖塔の周りには沢山の蜘蛛がいるために、蜘蛛 Spinne の俗称 Spinnerin から Spinnerin am Kreuz が生まれたという説もあったという。)

その後1818年にE.マルシュが Spinnerin am Kreuz という題名の中世の十字軍遠征を舞台とする小説を発表する。ここでは尖塔自体の由来、命名などの学問的研究よりもロマンチックな小説の面白さが中心となってしまっている。このロマンの本筋は、十字軍の旅、戦い、捕虜、解放、帰国後かなえられる愛であり、当の尖塔に関する話は、この小説のメインテーマではなく、巻末に城主の息女Hulda von Rauhenstein がヴィーナーベルクの木製の十字架のもとで十字軍に出征した恋人を待ちながら糸を紡いでおり、その後パレスティナから恋人が解放されたことへの感謝の印として木製の代わりに高価な石柱を立てさせるシーンがあるだけという。すでにこの話の原型についてはゴイザウが糸紡ぎで得られるであろう僅かばかりの金額であのような石柱を立てることは不可能として反駁していたにもかかわらず、この小説の反響は大きく、同類の小説がその後も出版されていったという。

以上のように、Spinnerin am Kreuz の名前の由来、語源解釈については諸説紛々であり(とはいえ基本的には、固有名からの説明と紡ぎ女の伝説から

の説明の二つのタイプに帰着するのだが)、特に現在巷間に流布している「夫の帰りを待つ糸紡ぎ女」というヴァージョンの伝説は、(おそらく糸紡ぎと石柱には何らかの関連があったのかもしれないにせよ）19世紀の新しい創作によるものであることが明らかとなったわけである。

次に尖塔の建設の理由である。ダームはまず1818年に行われた自然科学的証明を紹介している。それはヴィーナーベルクの塔の十字架の先端がシュテファン聖堂の先端と同じ高さであること、それを数学的に証明するために建てられたという筆者には意味も目的もよく分からないものであるが、これは実際の複雑な計測の結果反駁されたそうである。

他に理由づけの基本モデルとなっているのが、先述の無実の罪で処刑されそうになり、処刑直前に助かった男が感謝のために十字架を建立させたというメールヘンであり、この話をもとに無実なのに処刑された男の思い出のため建てられたといった多くヴァリエーションが語られているという。筆者には、石柱のすぐ近くに絞首台があったことからの連想的創作のように思われるが、もちろん作者が判明している以上、真の理由づけとはなりえないものである。

それに対して、ダームが、尖塔設置の理由づけの中で特に重要と考え、反駁しようとするのが、シュラーガーが1836年に提示し、その後継承されていった説、すなわち小尖塔は市の城内平和の境界石と同定されるというテーゼである。

まずこの（石柱＝境界石という）文脈で、シュラーガーは、伝説で小尖塔の創設者とされたクリスピンが祀った聖クリスピヌスとクリスピアヌスについて誤った拡大解釈を行っているとダームは指摘する。つまりもともとは「靴職人の守護聖人」であったはずの二人は、今や「境界の守護聖人」でもあるとされてしまうのである。以後の学者たちもそれを検証することなしに受容してしまったという。観光案内書に見られるクリスピヌスへの言及は、この解釈に由来するものであろう。

この拡大解釈よりもっと問題なのが、小尖塔の設置目的に関するシュラー

ガーの上述のテーゼ、尖塔はウィーンの城内平和の目に見えるしるしであるという解釈であるとダームは述べ、その反駁にかかるのである。（ダーム［5］101頁以下）

このシュラーガーの解釈は1296年のウィーンの都市法の第七条の城内平和に関する項を基礎とするものというが、ダームは、その文中にあるブルクフリートの置かれたという Ziel（現在では「目標、目的地」などの意味）が当時の用法では、特定の地点を示すことはないことから、それを尖塔に結びつけることには無理があることを指摘し、1296年の文書の Ziel を尖塔の原型、しかも13世紀に遡る城内平和の境界の役目をもった境界石とすることは誤りと断定する。

シュラーガーはまた自説のさらなる証拠として、市の城内平和に属する十字架像を修理したという記載のある1598年の市の出納帳、1711年の下オーストリア政府からウィーン市参事会に宛てた「いわゆる Spinnerin Creutz」近くの「城内平和に」属する道路の水たまりの補修に関する提議書を挙げている。

それに対して、まずダームは、1698年のレオポルト一世による城内平和特権付与で規定された境界石の分布について1825、26年に詳しい検証を行ったウィーン市の建築監査官の（具体的な町名、番地などが記されている）調査結果をもとにして、境界石は年代による大きな変動は見られないことから、少なくとも1700年頃、シュピンネリン・アム・クロイツが市の城内平和の最南端点を示していたことはありえないと主張する。そのうえでダームは、当時、シュピンネリン・アム・クロイツは実は隣接の（より南に位置する）インツァースドルフの域内にあったことを文献、地図に基づいて明らかにする。そして絞首台も何度か場所を変えたものの、インツァースドルフに属していたという。（このように絞首台もそのすぐ近くの尖塔も市の内側ではなくインツアースドルフに属していたとしても、しかしそのことで両者がウィーン市の所有物であったことは排除されず、実際、そのことはウィーン市に修理義務があったことを示す多くの文献が証拠立てているとダームはいう。ダーム

［5］108頁）

さらにダームは、15世紀初め、トリエステ通りの起点にある先述のマツラインスドルフがウィーン市の城内平和の外にあり、したがってそれより南に位置する石柱も市の城外平和の外に位置していたことや、マツラインスドルフがウィーン市に含まれるのは1727年であることを挙げて、1598年の出納帳の記述もそのまま受け取ることができないとし、小尖塔が城内平和の内部にあったとする出納帳の記述は、尖塔がウィーン市の所有物であることを強調するためであったろうと解釈している。ダームの論証がすべて妥当かどうか筆者には判断できないが、かなりの説得力をもって、尖塔＝城内平和の境界石説も否定されることになる。

最後にダームは、尖塔の建設目的について1839年以降、つまりシュラーガーの研究以降に唯一新しく提出された説を紹介している。それは1892年に発表され、その後忘れ去られてしまったというライシィングの研究である。彼の研究は、尖塔を古代ゲルマンのフルダ女神信仰と関連づけるものであるが、その紹介、検討に先立ってダームは、1937年に発表されたアンドレスのメンヒルについての研究にも触れている。この研究はライシングの研究とは無関係であり、しかもウィーンの尖塔を扱ったものではないのだが、尖塔の由来についての考察に転用できるものということで検討されているのである。（ダーム［5］109頁以下）

アンドレスは、ドイツ、ラインラントにある一般には Spillenstein と呼ばれている、そして中世には Chrimhildespil という名前で記録されている新石器時代のメンヒルを取り上げて、そのいわれを問題とした。彼はこの名前、Spillenstein もしくは Spellenstein が Spille、つまり Spindel（手紡ぎ用のツム）に由来し、女神Hulda（もしくは Holde）の持ち物（属性）であるツムを想起させるものと推定した。この女神にとり、境界石、メンヒルとそれによって画される土地は神聖なものだったという。そしてアンドレスは、こうした解釈が、ドイツに見られるその他の巨石が Spinnerin と結びつく伝説についての手がかりを与えると考えたのである。例えば、モーゼル北方にある

Fraubillenkreuz にまつわる伝説では、そこの石の上に糸を紡ぐ女が座っていたが、魔法で石にされてしまったとされている。こうしたメンヒルを女神の持ち物 Spindel の象徴とする考察がその後、複数の学者によってウィーンのシュピンネリン・アム・クロイツの名前の由来の解明へと転用されて、ヴィーナーベルクの尖塔以前に、より古いおそらく先史時代の石柱があり、神性を示す名前で呼ばれていたのであり、その名を新しい尖塔が受け継いだという説も登場する。

ダームは、その適否の検討はあとにして、次にヒルシャーによる要約をもとにライシングのテーゼを取り上げる。ライシングは、メンヒルの考察から出発するのではなく、あくまでウィーンの小尖塔の考察の範囲で、この尖塔を似通ったもう一つの尖塔と重ね合わせて検討し、メンヒルをシュピンネリン・アム・クロイツと関連させたのである。（ダーム［5］111頁）

もう一つの尖塔とは、ウィーンの南、やはり中世に作られたヴィーナーノイシュタットに現存する小尖塔であり、この石柱もシュピンネリン・アム・クロイツと呼ばれているのである。（ちなみにヴィーナーノイシュタットの小尖塔は高さが21㍍あり、プフスバウム以前にウィーンの尖塔を建てたとされるクナープの作品とされる。『レクラム美術案内　オーストリアⅠ』掲載のこの町の昔の見取り図（［7］611頁）からこの尖塔は城門の外に建てられていたことが確認できるが、現在は修復されて市の公園に移されている。なおダームの比較研究によれば、両者には様式的類似性はなく、ウィーンの石柱は13世紀末から15世紀初めのイギリス、フランスの古い小尖塔の系統に属するものであるという。またヴィーナーノイシュタットの尖塔は、ウィーンの尖塔より早くからシュピンネリン・アム・クロイツと呼ばれていたという。ここからウィーンの尖塔の名前はヴィーナーノイシュタットの石柱に由来するということも考えられるのだが、伝説は逆にウィーンから持ち込まれたという。）

さてライシングは、ウィーンとこのヴィーナーノイシュタットの二つの尖塔に同じように当てはまる次のような特徴を指摘する。

(1)　そこに女が座って糸を紡いでいたという伝説が結びついていること、
(2)　集落もしくは地域の境界をなしていること
(3)　処刑場がすぐ近くにあったこと。

ライシングは、これらの特徴に名前の由来についての糸口を見いだす。というのも境界石の周囲は悪霊の滞留する場所とされており、そこでは唯一糸を紡ぐ白い衣の女神、フルダによってのみひとは庇護されるからという。そうした女神の消し去りがたい痕跡がシュピンネリン・アム・クロイツにも認められるとライシングは考えるのである。また境界石（石柱ないし尖塔）と近くの処刑場の関係についても、フルダ女神の持ち物であるツムと類似するメンヒルは単に境界石だっただけではなく、古代ゲルマン人の集会と裁きの場を示す石碑であったからということで説明されている。そしてこのことがヴィーナーベルクの石柱と処刑場のセットにも当てはまるというのである。

ダームは、ライシングとアンドレスの研究方法、研究意図の違いを指摘したうえで、ドイツのメンヒルの研究成果をただちにウィーンの石柱に適用するべきではないこと、また境界石の守護者フルダとウィーンのシュピンネリンを結びつけることは、そもそもウィーンの尖塔が城内平和の境界石であるとする既に反駁された前提にたって可能であり、ウィーンの尖塔の原型がキリスト教以前の時代に遡るという結論には距離を取らなければならないとしている。筆者にはゲルマンの世界や境界にたむろする悪霊との関連づけ等、糸紡ぎ女伝説に比べてずっと魅力的で想像力をかき立てる仮説に思えるのだが、遠い過去に遡っての実証となると非常に困難なことは明らかである。いずれにせよ、この名前の由来と設置目的の同時解明を行っているといえるライジングの試みも不十分とされるのである。

その他、ダームは、古老から聞いたというヒルシャーの紹介するドイツ、シュヴァルツヴァルトの伝説、糸巻き型の石碑の場所で年老いた紡ぎ女が雪に埋もれて死に、そのためそこに石碑が建てられたという伝説や14世紀に遡る貧しい糸紡ぎ女が王のためのミュンスターをもたらしたというメールヘンなどウィーンの言い伝えに近いものを紹介している。

最後に、ダームは、もう一度、18世紀になって起こったこの小尖塔の呼称の変化に触れて、その重要性に注意を促している（ダーム［5］113頁）。1700年代初めに登場した Creuts-Spinnerinn ないし Spin（n）erin（-）（Creuz）は、（先述のように）1720年代以降、Spine、Spinen-、Spinnerkreuz と変化したが、同様の展開は、50年ほど前に、以前は stainan（石造りの）Creutz と呼ばれていたヴィーナーノイシュタットの石柱でも既に始まっていたという。1649年には尖塔は der Spinnerin（Spinnerin の）Kreuz と呼ばれる。ダームは、この属格の使用に、尖塔と紡ぎ女の密接な関係が示されていると思われると言う。そこからダームは慎重さをもってと断りながら、「Creutz-Spinnerin もしくは Spinnerin（-）（Creuz）という名前の背後には糸紡ぎを行う人物が隠されている」（ダーム［5］113頁）と想定していいだろうと述べ、以下の文章でその論文を閉じている。

「いずれにせよ無数の絶えず拡張され変化する伝説と解釈は、シュピンネリン・アム・クロイツをおそらく一番物語に富んだウィーンのシンボルにしているのである。」（ダーム［5］同所）

研究史をなぞるかたちではあったが、シュピンネリン・アム・クロイツの制作者、名の由来、建築目的について様々な考えを知ることができた。ただし名前の由来に関しては、解明の難しい謎であることも明らかとなった。

スフィンクスが道行く人に謎をかけたように、シュピンネリン・アム・クロイツは、そこを通る人、眺める人に、「私の名前はなぜシュピンネリン・アム・クロイツなのか」と、その自己同一性にかかわる謎をかけつづけるのであろうか。

筆者のような単純な人間は、遠くから見える尖塔の形が、逆さにぶら下がった蜘蛛のように見えるから、あるいは尖りが紡ぎのツムみたいだからと答えたいところだが、これでは崖ならぬヴィーナーベルクの坂を突き落とされてしまいそうである。

またこの場所全体についていえば、受難のキリストの十字架像と絞首刑台を備えたヴィーナーベルクの頂きは、筆者には、ウィーンのゴルゴタの丘（カ

ル ヴァリエンベルク）だったように思われてしかたがない。人間の罪の贖いのため磔刑になったキリストと（磔刑ではなく絞首刑であるが）極刑により裁かれる罪人のコントラスト、古代のフルダ女神もそうであったというが、シュピンネリン・アム・クロイツは、旅人に対してウィーン市のプレスティージを誇示する役割ともに、こうした死者の魂の彷徨する場所での鎮魂の役割、あるいは異教の神ヴォータンによる死者の略奪を防ぐ役割も果たしていたのではないだろうか、そんな想像も可能であろう。

最後に、この項で参照した文献［5］『ウィーンのシュピンネリン・アム・クロイツ』には筆者のもつ銅版画と同時代の銅版画や絵画の写真が９葉ほど収められている。筆者のものも含めてそのほとんどに共通するものがある。一つは当然といえどれも近くにあるはずの絞首刑台を書き込んでないことであるが、もう一つは台座周囲の階段に必ずといっていいのだが、シュピンネリンならぬ老若男女が腰を掛けている姿が見られることである。（公開処刑の場という事実はさておき）やはりここは、ウィーンへのあるいはウィーンからの旅人や村人が坂を登って一息つくための場所そしてまた旧市内への見晴らしで有名なベルヴェデーレ宮殿とは無縁の庶民がウィーンの眺めを満喫する場所でもあったようである。

2. Die Strudlhofstiege　　シュトルードルホーフ階段

ウィーン９区（アルザーグルント）は、ギュルテルとドーナウ運河にはさまれた一帯で、旧市内に北西で接している。アルザーグルントの名は、ウィーンの森に発し、この地を経てドーナウ運河へと流入していた（今も流れているが19世紀中葉、暗渠化された）アルス川に由来する。この区の中心付近を第四期の地層からなるアルザー段丘の崖線が縦断するように走っている。この崖線により、この区は上の台地と下のドーナウ運河に沿った沖積層の低地に二分されている。段丘といってもラーアベルク段丘のような高さはなく、

ショッテントアに近い一帯はなだらかな坂である。台地上には崖線と平行してショッテントアからクロスターノイブルクへ向かうすでに中世以来重要だったヴェーリンガー通りが北西に、またこの崖下をリーヒテンシュタイン通りが平行して走っている。（cf. クラー『ウィーンの定住形式』［2］80頁）

台地一帯は、近代的な新総合病院、1686年の傷痍軍人のための施設に始まりヨーゼフ二世が大改造を行った旧総合病院、マリーア・テレージアが設立したオリエント･アカデミーにまで遡る旧帝国領事アカデミー（現アメリカ大使館通商代表部）や古くからの大学の研究施設が点在する静かな雰囲気の地区であるが、低地は住宅街、商店街を形成している。一帯には19世紀半ばの市壁撤去までは旧市内防御のためめぐらされていた広い無人地帯､グラシ（斜堤）があったりまたドーナウ河支流の洪水地帯であったこともあり、居住地域形成は比較的遅かった（cf. クラー［2］86頁。クラーはまた次のように述べている。「ひとはベルクガッセとトュルケン通りの間からシュリック広場に至る大都会的な建物のブロックを『新ウィーン』と呼んだ；1852年以降建てられたそれらの住居はリンク通りの賃貸邸宅の先駆けとなった。」同書88頁。）公共的施設としては、かつてのリーヒテンシュタイン宮殿、現在の現代美術館のある公園や19世紀後半の建造であるロスアウアー兵営などがある。この地区の主要な通りの一つであるポルツェランガッセはかつてこの地にあった帝室陶磁器工房にちなむ。

さて、ネオゴチック風のヴォティーフ教会を左手に見ながらヴェーリンガー通りを進むことにする。ショッテントアから少し行くと、右手には運河に向かって下るいくつかの小路があるが、それらはみなゆるやかな坂となっている。たとえばフロイト記念館のあるベルクガッセやトュルケン通りがそうである。この辺はまだ台地と低地の差が大きくないことが分かる。

さらにヴェーリンガー通りを進むと左手にはヨーゼフ二世が建てた医学外科学軍事アカデミー、現在の医学史研究所（ここには様々な医学史史料が展示されているが、ビルロートが初めて行った胃がん手術［ビルロート法］で摘出した胃のホルマリン漬け標本も見られる）となっている「ヨゼフィーヌ

ム」の古めかしい建物が見える。右手には広い緑の敷地の奥に、かつてのクラム－ガラス御殿（この御殿は、1850年にディートリッヒシュタイン侯爵家からクラム－ガラス伯爵家に所有が移った。どちらも三十年戦争で活躍した祖先を持つ古くからの貴族で、クラム－ガラスは19世紀後半軍の最高指導者だった）、現在のフランス文化研究所が見える。正面入り口にギリシア神殿の柱のような柱が並ぶ二階建ての建物である。この敷地の角と大学の物理学化学研究所の建物の間の割合広い小路がウィーン生まれの有名な物理学者ボルツマンにちなんでつけられた（以前はヴァイツェンハウスガッセ［孤児院小路］だったという）ボルツマンガッセである。この小路を入ることにする。少し進むと細い通りと交差する。それがシュトルードルホーフガッセである。（この小路も1907年まではフェアゾルグングスハウスガッセ［養老院小路］と称されていた。改正の理由は定かではないが、ボルツマンの死亡が1906年であり、ヴァイツェンハウスガッセの名称変更と連動したのかもしれない。）ここを右に折れる。その先、突き当たりにある階段がシュトルードルホーフ階段、アルザーの台地とリーヒテンシュタイン通りの低地をつなぐ白い石灰岩の欄干からなる階段である。つまり先ほど述べた崖線の上部に出たのである。下までの落差は（十数㍍であろう）それほどでもない。この一帯は、見晴らしのよさで有名で、往時ショッテンポワン、あるいはショッテンビュールと呼ばれていた場所である。

かなり曖昧になってしまった記憶と手元の平面図をたよりに上から下への階段の様子を記述して見よう。

まず大まかな外観であるが、この階段はウィーンの階段に多い一直線に下へと向かって行くタイプではなく、つづら折りになっている。坂の低地側の何カ所かには支えの柱がありそこに手すりがわたされており、シンプルなデザインの深緑色に塗られた細工格子がはめ込まれている。階段の両脇には格子のついた飾りアーチ（Blendbogen だましアーチ）を備えた側壁があり、階段を両脇の建物から遮断している。階段の数カ所には街路灯が立っている。左右に（秋には黄色く色づくキヅタなどの）枝振りの良い広葉樹が数本そび

え、階段以外の余った空間は植込みとなっている。白い手すりと深緑の格子や街路灯、薄茶色の壁面の色のバランスが絶妙である。

次に階段を下りてみよう。

小路の突き当たりは柵、その前に木が二本、そしてベンチがある。その左右が階段への下り入り口となっている。中に進んで左右どちらでもいいがほんの数段の階段を降りると最初のテラスに出る。ここは左右非対称で右手は植栽されており、今度は左側だけの階段を数段下る。そこも小さなテラスになっている、更に数段下ると踊り場である。この踊り場の段を数段下ると、今度は左から右へ向かうゆるやかな坂、というより長い石畳数段からなる緩やかな傾斜路 Rampe である。この階段の行き止まりがまた踊り場、今度は左に方向が変わり、同じようにゆるやかな傾斜路となる。突き当たった次の踊り場を右手に曲がるとさらにもう一度右に曲がり、今度は十数段を下って真ん中に位置する少し広い最後のテラスに出る。そこにはニッシュがありその中心の円形の魚頭（ひげがあって鯉のようにも見える）の口から流れ出る水を水盤が受け止めている。壁の向かって左手には後述するハイミトー･フォン・ドーデラーを記念する銘板（彼の作品の冒頭の詩）が埋め込まれている。あとは左右対称の半円形の細かな階段を下りれば、リヒテンタールの低地である。入り口正面の壁面にも、大きな水盤があり河伯のようなマスクの大きなレリーフの口からほとばしる水を受け止めている。登りの入り口は左右に曲線となって開かれており、（どこか宮殿の正面階段を連想させるのだが）、上方の台地へと人々を誘っているようにも思える。手すりの終端は渦巻き状に厚くまるまっており、ロールケーキのような円柱形の低い門柱となっている。まさかシュトルードル（Strud(e)lは「渦」の意味であり、また渦巻き状のウィーン菓子の名前の一つでもある）の名前を意識しての遊びではないと思うが。手すりの終端は完全な左右対称ではなく、向かって右側は背の高い石柱となって柵へとつながっている。なおこの階段は、直接リーヒテンタール通りに面しておらず、少し引っ込んだ場所にあり、階段の開設とともに作られた小路でワンクッション置いて通りにつながっている。そのおかげで大

通りの喧噪が弱められている。

次に下から上への登りの描写を、これは建築家テツラーによるもので筆者の記述よりずっと正確であると思うので紹介しておこう。

「リーヒテンシュタイン通りないしシュトルードルホーフガッセの下部から始まって二つの対称的に配置された四分の一円の形の階段が壁面に泉のある「小テラス」に至る。ここでシンメトリーの原理が捨てられる。12段のこの階段の袖は、今度は右手の方向転換の踊り場を指し示す。そこから二つの独立した段により三等分された傾斜路が左の方向、相似した踊り場に続く。そこから段差のない傾斜路となってこの施設の右側面を目指して進む。もう一度方向を変えてひとは再び踊り場に達するが、それは、この箇所で最後にシンメトリーに戻るかぎりで最初に挙げた場所に対応している；それぞれ四つの対称的に配置された段を経てひとはシュトルードルホーフガッセの上部に達することになる。基本的な造形の要素としては、さらに経路の方向転換場所や傾斜路に配置された飾り街灯が、また上部のだましアーチのある側壁を挙げることができるかもしれない。この側壁はこの階段を近隣の土地から遮っている。」（『シュトルードルホーフ階段　ある場所の伝記』［9］28頁の引用。）

この階段のデザインは、時代の潮流でもあったユーゲントシュティール（アールヌボー）の影響を受けているというが、目立った装飾もないし、筆者には欄干の格子模様くらいがそうなのかと思われる程度で、果たしてユーゲントシュティールの階段といってよいのか分からない。同じ文献［9］24, 25頁掲載の最初のプラン（その後のプランは、現在のものに近いジグザグ形であるが、ほぼ左右対称で傾斜路はない）では正面をまっすぐ登った一段目のテラスから左右に半円形の長い階段が一気に上部に達しており、正面の壁は二階建てで下のニッシュには獣面の出水口が、上の縦長のニッシュには、新古典主義の代表的画家アングルの「泉」を思わせる左手を上に伸ばして壺を支えるかのようなポーズの裸婦像が置かれている。この曲線階段は、このプランのものほど急階段ではないが、バロックを代表するシュヴァルツェンベルク宮殿（現高級ホテル）のエントランスの階段を連想させるような形で

ある。いずれにしても人を誘い込むように左右に開いた登り口のデザインは、何かバロック宮殿、御殿の内部の正面階段を連想させるものがある。

なお筆者は、建築史および芸術史に関して全くの素人であり、これはあくまで個人的印象にすぎないのだが、現在のシュトルードルホーフ階段の登り口のデザインの大枠が、ベルヴェデーレ宮殿の庭園の段差を利用して作られた「下のカスケード」に非常に似通っていると筆者には思えるのである。やや簡略化された姿の現在のカスケードにはそれほど類似性は感じられないかもしれないが、18世紀の銅版画に描かれたこのカスケードでは（文献［10］49頁）、それが顕著なような気がする。カスケードの中心にライオンらしき大きな獣面、左右に４つの小さな獣面が据えられている。それぞれの獣面の口から手前の池へと滝のように水が落下しているのだが、真ん中の獣面から大量に流れ落ちる水は、シュトルードルホーフ階段の下の人面から落ちる水のように、水盤が（ただしギリシャ神話の半人半魚のトリトンや海の精ネレイデスたちが下で支えている豪華なものである）受け止めている。カスケードの両脇の欄干は左右に広がりながら低地に達するが、さらに池に沿って伸びて真ん中で左右二つの大きな渦巻きStrudel!となって閉じている。カスケードの左右の欄干の外側はゆるやかな坂のようである。さらにまた上ベルベデーレ宮から下ベルベデーレ宮へと下る庭園左右両脇の坂道は緩やかな傾斜路となっており、これもシュトルードルホーフ階段の二つの傾斜路を思い起こさせるものである。もちろん設計者が、このカスケードを意識していたのか、その可能性は低いであろうが、カスケードの意匠からは、少なくとも筆者には何か階段下部のプロトタイプのようなものが感じ取れるのである。いずれにせよ、この階段の意匠は、ユーゲントシュティールというよりも、むしろユーゲントシュティールが反発した歴史主義の所産といえるのではあるまいか。

さてシュトルードルホーフガッセの名前は、この地にゆかりのある画家ペーター・フォン・シュトルードル（1660年－1714年）に由来する。『シュトルー

ドルホーフ』（[9] 37頁以下）によれば、シュトルードルは、南チロル、ノンスタールの中心地クレスに生まれた。ヴェネチアで芸術家としての修業を積み、1686年頃兄弟の彫刻家パウルともにウィーンに向かった。トルコ襲来により破壊された施設の修復の必要、バロック期の芸術家の世代交代時期に遭遇し、シュトルードルは順調なスタートを切り、1689年には宮廷画家となる。そして1690年に、当時遮るものもなく見晴らしのよかったアルザーグルントの崖の上、ショッテンポワンに広大な地所を購入し、館（シュトルードルホーフ）を建て、そこにオーストリア最初の美術アカデミーを設けた。（このアカデミーが発展してのちに「ウィーン造形美術アカデミー」となる。）アカデミーの経営は一時期経済的に困難となるが、ヨーゼフ一世の支援により経営基盤が確立し、シュトルードルホーフは、上級宮廷画家として爵位を授けられるまでに至る。なお DEHIO によれば、祭壇画や聖書等を題材にした彼の作品のいくつかは、市内の教会やホーフブルクに現存する。

この館は、1713年のペスト流行に際しては短期間だが病院として使用される。1714年のシュトルードル死後、アカデミーは一時活動を停止したが、1726年にケルントナー通りに移される。館は息子が継いだものの、次々と人手に渡り、1759年にはスパニッシュ・シュピタルの所有となった。この病院は当初ハンセン病患者と性病患者を収容したが、のちに捨て子の施設を加えた。1795年には、この地所は分割売却される。その一部は隣接の帝室孤児院に併合された。ボルツマンガッセの旧名、ヴァイツェンハウスガッセ（孤児院小路）は、こうした経緯による。

それまでは袋小路であり、住民は低地に降りるためには時間のかかる迂回路を通らなければなかったこの場所に、シュトルードルホーフ階段が竣工したのは今からほぼ百年前1910年である。設計者はヨーハン・テオドール・イェーガー（1874年～1943年）である。これも『シュトルードルホーフ』（[9] 19頁以下）によれば、彼はハンガリーのナギ・スラーニの生まれで、父親は砂糖製造工場の化学技師をしていた。彼の幼時に一家はウィーンのリージングに移住した。イェーガーは建築学を修得し、工科大学の助手を短期間務め

た後、1900年にはウィーン市の建設局の役人となり、初めは彼は道路建設の部署に、のちに都市整備の部署に移った。この部署で彼はシュトルードルホーフ階段の設計を行ったのである。

この時代はカール・ルエガー市長のもと、大規模公共施設の整備・建設が進められた時代である。そうした大規模プロジェクトから見れば、階段の建設は取るに足らないものように見えたが、イェーガーはこの階段に設計に力を注いだという。いずれにしても、そうしたウィーン市の都市整備が大々的に行われた時期だったからこそ、シュトルードルホーフ階段のような、機能性を二の次にした凝った意匠の階段を造る余裕があったのかもしれない。

ところでいきなり話しが変わるようで恐縮であるが、生の哲学者の一人といわれるジンメル（1858年－1918年）は、師リッケルトの現実についての見方、つまり現実の世界の事象はお互いに連続しているとともにそれぞれが異質的であるという二面性（「異質的連続性」）を持つため、あるがままの現実認識は不可能であるという考えを踏まえて、自然界の形象について「自然界においてはすべてのものは結合されているとみなすことができると同時に、すべてのものは分割されているとみなすことができる」（ジンメル（6）35頁）と述べる。ジンメルの場合、リッケルトの言う連続性が「結合」という動的概念と、また異質性は「分割」という動的概念と関連づけて捉え直されているのである。

ジンメルによれば、自然界の事物はこの両概念、自然の両義性を知らず、あるがままに横たわっているのに対し、人間だけが「自然と異なり、結んだりほどいたりする能力を与えられて」（同所）おり、「われわれはつねに結合されたものを分割し、分割したもの結合する存在者なのである。」（同36頁）しかもこの結合と分割は、お互いに相手を前提しあうという相関関係にある。また人間の行為は、この結合状態と分割状態のどちらが自然の側にあると感じられるか、どちらが人間に側に与えられた課題と感じられるかにより分類可能という。

こうした分割と結合という動的な概念をキーワードにして、ジンメルはエッセイ「橋と扉」（1909年）の中で、実用のために作られた人工的建築物である「橋」および「扉」について興味深い形而上学的考察を試みている。これらの製作には、結合と分割という人間の意志、「生の力学」が反映しているというのである。今、形而上学的含意のより深いとされる「扉」については置くとして、橋についての考察を見てみよう。ジンメルは橋と人間の関わりについて、以下のように述べる。

「河の両岸がたんに空間的にへだてられているばかりではなく、『分割』されてもいると感じとるのはわれわれだけである。つまり、もしわれわれが両岸をあらかじめわれわれの目的概念、われわれの欲求、われわれの想像の中で結合していなければ、分割の概念は意味をもたないだろう。･･･そして精神はこの分割にむかって和解と合一の手をさし伸べるのである。」（同37頁）

（また実用目的に基づいて作られた橋は、風景の両側面を結合するための支点が、身体的移動に対してではなく目に対して与えられる場合、あくまで自然の風物の一環としてではあるが、美的評価の対象ともなりうるともジンメルはいう。）

このように橋は、自然（河）の側に分割状態を感じ取り、分割された両岸を結びつけようとする人間の結合への意志を具象化したものなわけである。この橋と結合により結ばれる両岸の関係は緊密であり、橋の存在は偶然的な自然所与を統一性へと高めるという。

さて、この橋による結合という考えを、安直ではあるが「階段」に適用してみよう。ジンメルの言うように、橋は、分割と結合のうちで結合に重点をおいて、「しかも橋によって具体的に測定できるものとなる両岸の水平距離をも」（同38頁）克服しているとすれば、当然階段は自然（崖）によって分割された上（台地）と下（低地）を結ぶことで垂直距離を克服しているということになろう。

ジンメルはまた、これは橋よりも形而上学的意義が深いとされる「扉」と［橋」とを比較して、同じように水平面にありながらも「有限な」内部と「無

限な」外部との分割でありしかも結合である「扉」の場合、出ることと入ることの意図は全く異なるのに対し、「橋の場合にはどちらの方向にむかって渡るかということによって意味の相違は出てこない」（同40頁以下）ことを指摘している。

このように橋による水平方向の結合は、此岸の彼岸への、また逆方向の延長ないし拡張であり、もちろん新しい世界が開かれるにしても基本的には同質的なものを結びつけているわけであるが、対して階段による垂直方向の結合の場合は、事情がいささか異なるといえよう。というのも上下ないし高低という位置の差を表す言葉には、上下関係など価値関係が含意されることが多いからである。とりわけ上昇は価値の増大あるいは未来への飛躍に、下降は価値の減少あるいは過去への転落を思わせる動きであり、それは階段の昇降によって比喩的に語られることがしばしばである。

こうした価値の置き入れはとは別に、地形の高低でいえば、かつて東京の「山の手」、「下町」という言葉は、ただ地形的位置（高さ）の相違を示すだけではなく、台地に住む人間と低地に住む人間の生活様式、時代感覚、ものの考え方、気質などの違いを表す言葉であった。つまり垂直方向に分割された二つの世界は、しばしば異なった世界であることが多いのである。したがって階段は、ただ上下の地域を機械的に結びつけるだけでなく、異世界どうしを、そして異なった世界の人と人とを結びつける役目を持つことがあるわけである。

そこでシュトルードルホーフ階段であるが、この階段が結合する二つの世界も、もちろん巨視的にみれば同じウィーンの一地域ではあるにせよ、やはり異なった生活様式の地域といえよう。既に触れたように、崖の上は、古くからの巨大な総合病院の街（医者の街）であり大学街である（cf.「司法省に近い南西部には弁護士などの法律家が多く住み、大学と総合病院に近い北部には医者が集中した。」田口（3）73頁）。また先に触れた現在のフランス文化研究所、戦前のクラム・ガラス御殿は19世紀後半、成り上がり貴族ではなく古くからの世襲貴族たちの集う社交場として有名だった。それに対して崖の

下は、リーヒテンシュタイン宮殿（1704年完成、当時は市外の庭園宮殿だった）があるとはいえ、新しく発展していった住宅街である。しかも迂回路を経ない両者の直接的交流はかつては崖により阻まれていただけに、両世界の住民のエートスも異なったまま保持されてきたといえよう。

この階段のこうした地形的文化史的位置を踏まえて、保守派の作家ハイミトー・フォン・ドーデラーは、長編小説『シュトルードルホーフ階段　あるいはメツラーと時代の深み』（1951年）の中で、上流市民階級ないし貴族の社会の日常と庶民の社会の日常という異世界どおしの、さらにはハープスブルク帝国時代と帝国崩壊後の共和国時代という異なった時間体験の結節点･交流点の役割をシュトルードルホーフ階段に担わせた。この小説は当時ベストセラーになり、それまで半ば忘れられたままだったシュトルードルホーフ階段を一躍有名にしたことでも知られている。一時期、この小説を片手にしたファンの階段詣でまであったという。ペーパーバック版で600頁を越えるこの小説では、実に大勢の人物が登場し、そのウィーン的日常生活が、二つの社会、そして過去（旧帝国時代）と現在（20年代ウィーン）を行き来しながら描かれる。彼らは、錯綜し合いながらどこかでつながってゆくが、その最終的な結び目は、かつての帝国の若き軍人であり、現在は国営煙草会社の官吏である小説の主人公メツラーである。小説のテーマは、初めはいわば「特性のない男」であったメツラーの人間としての成熟（人間化ないし人格化）であるといわれている。そしてこの小説の中で、シュトルードルホーフ階段は、（ある恋愛カップルの悲劇的な破局の場としても登場するが）、何より、周囲から自立し始めたメツラーの新しい心の支え、守護神 genius loci として描かれることになる。（たとえば、「最初、彼は上の傾斜路に立ち止まっていた。というのも下ではカップルがキスの最中だったからである。メツラーは足早にそっと彼らの傍らを通り過ぎた。そのほかにはまったく人影はなかった。今や夜間となった彼の階段訪問は、ひとが寝る前になおよくするような軽い散歩を意味するのではなかった；そしてまたもの悲しげな思い出でといったようなことを意味するのでもなかった。むしろそれは一つのお伺い Anfrage 以外の何もので

もなかったのである。彼をこの階段へとかり立てたのは、かつて敬虔な異教のデルポイ巡礼者たちを導いていたものの埋ずもれた最後の残りだった。そのように彼をここの genius loci へと導いたのである。この神は黙して答えなかった：今回は。小さな頭をかしげて、シュトルードルホーフ階段の樹木の精ドリュアスはとある樹幹の大きな枝あるいは他のどこかででぐっすり眠っていたからである。」『シュトルードルホーフ階段』［8］355頁）

この長い長い、いささか冗長で途中で何度もあきらめたくなる小説の概要だけでも語ることは筆者にはできないが、シュトルードルホーフ階段の演じる役割ないし意味づけについては、以下の簡にして要を得た説明を参照してほしい。

「この小説のテーマを表現するのにぴったりの空間を提供しているのが、物語の主なる舞台となっているウィーンの第９区、アルザーグルント（Alsergrund）である。そして、視覚的にこのテーマをあらわしているのが、そこに実在する『シュトルードルホーフ階段』なのである。この地区はリーヒテンタールをはさんで高台と低地に分かれていて、高台は昔からの市街地に通じ、それと隔絶された低地は新しく開けた地域に通じている。この地勢から、一方は過去を、もう一方は当時、すなわち1920年代をさらにこの地域に示された構造が、当時のオーストリアの状況をも写し出しているとドーデラーは理解する。この全く異なった性格を持った二つの地域をつないでいるのが、小説の表題の『シュトルードルホーフ階段』である。したがってこの階段は、二つの違った世界、過去と現在を結ぶかけ橋として小説に登場している。（改行は筆者）

実際低地の居住者であるメツラーは、それを通って上の世界へと導かれる。この階段は、小説の巻頭に寄せられた詩ですでに暗示されているように、戦争の時代をものり越えて存在しつづけ、ドーデラーの求める不動なものの証しとなる。

そしてまた、この階段の持っている特殊な構造、すなわち二つの登り口から入り、それが一つになり、幾度も踊り場で区切られ、その都度反転し

てゆるやかな勾配をへて上の一つの出口に通じる構造に、彼は人間の人生の行程－回り道をしながらの人間化－を読み取っている。･･･」（山村雅人「ハイミトー・フォン・ドーデラー　小説『シュトルードルホーフ階段』－Menschwerdung（人間化）における「発展」とは」『山梨医大紀要』 第一巻（1984年）60頁以下）

メツラー以外にもこの階段は小説の登場人物に不思議な作用を及ぼしている。ここではシュトルードルホーフ階段を通しての、上から下への、つまり上流社会から新しい異世界への結合の一例を、同じ小説の中から紹介しておきたい。

上流市民社会に属するギムナジウムの学生ルネ･シュタンゲラー（作者の分身といわれる）は､姉エテルカから頼まれた用事で後に義兄となるグラウアーマンと会うためボルツマンガッセの領事アカデミーに行った帰り道、初めてシュトルードルホーフガッセに入り込む。

「さて道は行き止まりである。ルネは階段の始点に立っていた。シュタンゲラーは自分の生まれた街をあまりよく知らなかったし、この地域はほとんど全く知らなかった。･･･今、シュタンゲラーが『シュトルードルホーフ階段』の上の始点で感じた小さな驚きは、彼のロマンチックな私事にぴったりと合い、いわば仕上げの一点を彼の気分全体に加えたのだが、この気分はわずかなきっかけによって過度の上昇を被った。彼には、彼が自分の好みに応じて役を演じることに憧れていた人生の諸舞台の一つがここでぱっと開いたように思えた。そして彼は階段と傾斜路を見下ろしている間に、ここでなしうるであろう舞台登場をただちに心の奥底で体験した。もちろん、下降と上昇そして真ん中での出会い、全くオペラのような決定的な登場をである。

簡単に言えば：ひとが舞台シーンでだけ覚えているが、しかし人生において－まれではあれ、実際に存在するようなシーンである。そしてそれらは全く突然成就するのである。そしてひとはあとからそれらをそれと知るのである。

ルネはゆっくりと階段を下った、考え込むというより享楽的に。

斜面には何本かの木の樹冠が群がるように咲いていた。階段は静かにしかし驚くほど深く下へと導いた。ここは土のような香がした。」（[8] 129頁）

気分を高揚させて階段を下りきったルネは、少しして「17歳くらいに見える」少女、パウラ・シャフルと出会うことになる。すでに働いていた彼女はこの低地リヒテンタールの住人だった。これをきっかけにルネの世界は広がっていく。

ところで、この階段の魅力はどこにあるのだろうか。この階段は直線階段とも、あるいは本来は結合するものなのに人間ないし車が分割してしまった道に掛けられた橋とも階段ともつかない歩道橋なる代物とも大きく違っている。シュトルードルホーフ階段は、台地と低地の間の移動時間の短縮という階段の本来の機能を無視し、festina lente と非常に逆説的に語りかけ、さらには方向転換までさせて、いわば時間の進みをわざと遅らせる。また通行する者をまるで小庭園を散策しているかのように夏は緑の中に、秋は黄葉の中に包み込むんでしまう。さらには水の流れまである。このように人間をとてもゆったりとした気持ちにさせ、何かを問いかけ、そしてロマンチックな気分を醸し出すところに、この階段の魅力があるのだと思う。（同様に凝ったつづら折りの階段としては1886年建造の６区（マリアヒルフ）のフィルグラーダーシュティークがあるが、こちらの方は街中で緑もなく、周りが騒がしく、残念ながらシュトルードルホーフの階段のような雅趣に富む雰囲気はない。）さらには、ジンメル風に表現するなら、この階段は自然によって分断された台地（上）と低地（下）とを単に人間の工作物によって結合しているだけではなく、分断されていた二つの世界をあたかも自然が結合したかのように思わせることにより、実は克服されたはずの自然と克服したはずの人工物ないし人間との結合・融和を見事に実現しているといえるのではないだろうか。

いずれにせよ、シュトルードルホーフ階段は、とても豊かな表情をもった階段なのである。

3. Die Flaktürmer in Wien　ウィーンの高射砲塔

かつて二度にわたるオスマントルコの襲来を何とか食い止めたウィーン旧市内（１区）は、第二次大戦末期、ドレースデンなどのような壊滅的被害は免れたものの随所が爆撃で破壊された。1949年制作の映画「第三の男」は、多くのシーンをイギリスの撮影所で収録したというが、それでもまだ瓦礫の山の残るホーエ・マルクトやプラーターの惨状を映し出している。また写真集『灰の中のウィーン　ウィーンの瓦礫の時代1945－1948』（文献［1］参照）には、被害を受けた市内の建物、屋根が落ち鉄骨だけになった国立歌劇場、500年前のカラ松で造られた大屋根全体が焼け落ちたシュテファン大聖堂（ただしシュテファン大聖堂の場合、地元の窃盗団の放火が原因であるが）、これも鉄骨だけになったプラーターのサーカス劇場などの写真が記録されている。

しかし大聖堂は善男善女の奉仕もあっていち早く修復されたし、遅れて歌劇場も1955年には再開にこぎつける。

今日旧市内においてあの大戦の惨禍を思わせるものは、筆者が思いつく限りでは、ドーナウ運河沿いのモルツィン広場の記念碑、そしてアルベルティーナ広場の記念碑くらいのものだろうか。前者の広場には戦時中ホテル・メトロポールがあった。このホテルにはゲシュタポ本部が置かれ、ユダヤ教徒の収容所送りのための選別が行われ、多くのユダヤ教徒が、ここからリンツ手前のマウトウゼンの収容所（戦時中のべ約33万５千人が収容されたという）に送られたのである。記念碑には「決して忘れるな」と刻まれている。後者は、国立歌劇場のすぐ北側、版画のコレクションで知られるアルベルティーナ宮に隣接する広場であり、かつてここにはフィリップスホーフという建物があったが、アルベルティーナ宮の傾斜路部分ともども爆撃で大きく破壊され、地下に避難していた約200名が生き埋めとなり亡くなったという。この広場には1988年に前衛的彫刻家フルデイカの「戦争とファシズムに対する警告」の白い立像と茨で囲まれた黒い石が置かれた。あとは、１区、３区にまたが

るシュヴァルツェンブルク広場にある巨大な戦士立像、「ソビエト軍兵士の名誉記念碑」であろうか。

しかし旧市街の外には、「ナチスの巨大な棺桶」「ウィーンの体に突き刺さった矢」「建設者の狂った妄想の無言の証人」等ともいわれる見上げるような高さで威圧感をもった戦時中の建造物が複数残されている。一目見たら忘れられない異様な形をしたそれらの建物は、ウィーンを空からの攻撃から守るために建てられた Flakturm（複数形は-türmer）「高射砲塔」である。（Flak は Fliegerabewehrkanonen の略語で「高射砲」の意味である。）フラークトゥルムは、本来の高射砲塔（Gefechtsturm 戦闘塔、以下Ｇ塔）と付属の指揮塔（Leitturm、以下Ｌ塔）が対になっており、ウィーン旧市内の周囲３箇所（正確には４箇所であるが）にいまだに風雨に曝されたまま聳えている。３箇所とは、建設の年代順に、３区のアーレンベルク公園に一対、次に７区のシュティフト兵営と６区のエステルハージ公園の一つ、最後の終戦の年の一月に完成した２区アウガルテンの一対である。（なお『ウィーンだけ』（[14] 146頁）の高射砲塔紹介では、アウガルテンが最初とされているが、これは誤りである。）

軍事史関係の文献や建築関係の文献には、これらの高射砲塔の紹介等があるようだし、また最近は写真入りでこの塔を紹介している邦語のウェブサイトも増えてきている（興味ある読者は「ウィーンの高射砲台」で検索されたい）。しかし少なくとも一般の観光案内書は取り上げないし、取り上げてもアウガルテンの箇所で一二行程度であり、また、筆者の有するウィーンの高射砲塔について述べた邦語文献などもほんのわずかにすぎない。

例えば地理学者で専門的知見だけでなくウィーン滞在中の非常に示唆に富む観察を記した坂口豊『ウィーンと東アルプス』（(2) 35頁）にあるアウガルテンの外から撮影した「アウガルテンの高射砲台」というキャプションのついた写真、そして「当時、市内のいくつかの公園には高射砲台が造られていた。不幸にして聖シュテファン大聖堂は、アーレンベルク公園、シュティフト兵営、アウガルテンの高射砲の十字砲火の直下に位置していたので、砲弾の破片によって損傷をうけた」という同書の記述、そしてウィーン在住が長かっ

た写真家、田中長徳の写真集『Wien、Praha, 1996』（アルファベータ1996年）の中に（38頁）何の説明もなしに掲載されたすぐにアウガルテンのＧ塔と分かる写真くらいである。

そこでこの高射砲塔について、主としてバウアー『オーストリアの記憶文化に映し出された高射砲塔』（文献［11］）、ヴィレ『ウィーン、ベルリン、ハンブルクの高射砲塔』（文献［12］）などの著作に依拠しながら、簡単に見ることにしたい。

まずこの建物の建設の経緯である。1938年以来ドイツでは人口10万以上、軍需産業都市、鉄道の集中箇所など一定の条件のもとに多くの防空施設が建設されたというが、それとは別にヒトラーは、帝国首都ベルリンと最重要港湾都市ハンブルクを空から守るための防衛施設、つまり高射砲塔建設を計画した。1940年９月16日にその実施が決定され、ただちに建設が始まる。なおブレーメンとミュンヘンにも予定されたものの、それらの計画は実現に至らなかった。さらにヒトラーは1942年9月9日に「管区首都」ウィーンにも高射砲塔を設置することを決定し、ウィーンの高射砲塔の建設は1942年の暮れに開始された。なおヴィレ（［12］16頁）によれば、第二次大戦の開戦当初ウィーンは東部戦線、西部戦線から遠くにあり直接の被害を受けていなかった。また連合国側の航空基地は、北アフリカ、マルタとオーストリアから遥か遠くに位置していたため、ドイツのようにイギリス軍による激しい空爆は経験していなかった。しかしその後イタリアからの爆撃機の発進が可能となり、オーストリアも次第に南からの空爆の脅威にさらされるようになったという。オーストリアへの空爆は1943年８月、軍事工場のあるヴィーナーノイシュタットに対して行われたものが最初である。

次になぜ高射砲台ではなく、高射砲塔なのかであるが、大都会の住宅密集地では、高射砲台は、低い角度で発射された砲弾が誤って当たらないように周囲の建物より高くしなければならなかったこと、また指揮塔も攻撃機に対する広い視界を必要としたため、同様に高塔の形態を取ることになったとい

う。ウィーンで一番高いアウガルテンのＧ塔は55㍍、一番低いアーレンベルク公園のＬ塔でも39㍍の高さである。また打ちっ放しの鉄筋コンクリート製の壁の厚さは2.5㍍から3.5㍍に及んでいる。ウィーンで塔の建築が始まった時期は、戦局に暗雲が立ちこめ始めた時期であり、壮年は戦線へと送られ、明らかな労働力(そして建築資材)不足だった。そのため高射砲塔の建築には、ユーゴスラビア、ギリシャなどからの外国人労働者、ソビエト軍捕虜の「自発的助力者」(収容所よりは待遇がましだったという）などが動員されたという。

さて高射砲塔の外観であるが、Ｇ塔にはタイプが三つある。

タイプ１：中世の城郭ないし平地の要塞といったイメージで、直方体の建物の四隅にさらに直方体の塔が接合した形をしており、それぞれの四隅の屋上に高射砲台が設置されている。

タイプ２：直方体の塔の屋上に二つずつがペアとなった四つの分厚い円いタンクのような構造物が置かれ、その各々が高射砲台となっている。

タイプ３：視覚的には円柱に見えるが平面図では16角形であり、厚い円盤状の屋上に四つの台座が設けられており、またその下には帽子のツバのようなせり出しがあり、小円形の「ツバメの巣」と称される口径２㌢から３㌢の火砲用の露台が８つ出ている。

タイプに関する設計変更は、先行の高射砲塔運用からの経験に基づく改良や次第に深刻化する建築資材不足のための経済効率化の必要といった事情によるといわれている。(なおベルリンのＧ塔３基とハンブルクの１基はタイプ１，ハンブルクのもう１基とウィーンのアーレンベルク公園の１基がタイプ２，ウィーンの残りの２基がタイプ３に属している。)

Ｇ塔の屋上の四つの高射砲台座には、順にAアントン、Bベルタ、Cツェーザー、Dドーラと呼ばれる高射砲が据えられており、それらの口径は、高塔により異なっているが、10.5㌢から12.8㌢の大きさだった。戦争末期には、高射砲部隊は前線に派遣され、高射砲塔のマンパワーは不足してゆく。そのため15歳から18歳の生徒が「空軍補助要員」として動員され、高射砲に関する教育訓練を受けて現場に配置されたという。対空砲火の効果についてははっ

きりとした記録はないというが、戦争末期、敵の爆撃機の性能向上もあって期待された効果は発揮できなかったという。（当時15歳でFlak勤務の空軍補助要員だった人物の詳しい体験談がバウアー［11］80頁以下に載っている。）

Ｌ塔については、細長い直方体で、タイプに関して大きなヴァリエーションはないが、アーレンベルク公園のそれは、円形のせり出しが四隅にではなく側面から出ている。Ｌ塔の屋上には「ヴュルツブルク－リーゼ（巨人）」と俗称された空襲時格納可能な大きなレーダーと距離計測器があった。レーダーは30年代に軍事目的に使われ始めたばかりだったが、Ｌ塔のレーダーの探知距離は60～80㎞で、主として敵機の早期発見が目的だったという。なおＧ塔とＬ塔は非常時に備えて地下道でつながっていた。

これら塔の屋上階の軍事施設の下には広い空間があったわけであるが、ウィーンの場合、その内部は10階建てないし13階建てになっていて、自給自足のための諸設備、太陽エネルギー（南側と北側の温度差）を利用した電気を使わない空調装置、毒ガスに対する空気濾過装置も備えられ、食堂、衛生施設も完備していた。

筆者は初め知らなかったのだが、高射砲塔の地上に近い階は別の階段から外に通じる防空壕として使用された。高射砲塔は戦闘施設であるとともに大規模な避難施設、シェルターでもあったのである。たとえばアーレンベルクのＧ塔の三階には、「母子のみ」という矢印の表示が今でも残されている（バウアー[11]33頁）。本当なのか疑念を抱かせるような数字ではあるが、空襲時、その中には１万５千人から４万人（ないし３万人）の市民が（それだけの人数を避難させるためにはかなりの時間を要したのではないかと思うが）収容可能だったという（バウアー［11］30頁）。もちろんそうした人数分の大量の糧食が備蓄されていたわけではなく、あくまで一時避難の施設ではあった。実際にこの中に避難した人々がどのような体験をしたのか、知りたいところであるが、なぜか手元の資料はこの点については触れていない。

ところで、これらの高射砲塔の設計者は、ドイツ人の建築家フリートリッヒ・タムスである。ヴィレおよびバウアーによれば（ヴィレ［12］42頁以下、

バウアー［11］第5章、バウアーは一貫してタムスに批判的な筆致である）、彼は1904年にドイツ北東部のシュヴェーリンに生まれ、ミュンヘン、ベルリンで建築を学び工学士の称号を得た。ベルリン市の橋梁建設局に勤務した後、アウトバーンの橋梁設計に従事する。アウトバーン建設の指揮者はのちに帝国軍需大臣となり帝国の建築業界を支配することになるフリッツ・トートだった。1938年から40年にかけて建造されたオーストリア、リンツのニーベルンゲン橋の設計により、タムスは頭角をあらわすこととなったという。

1940年10月１日、タムスはトートにより高射砲塔設計を任命され、高射砲塔の設計にとりかかった。まだ30 代の若さである。また1942年にはヒトラーにより母校ベルリン工科大学の正教授の称号を与えられるに至る。

設計にあたってタムスは、目的に応じた機能性に重点をおきつつ、古典的な様式を用いることを試みたという。彼のデザインに影響を与えたものとして、神聖ローマ帝国皇帝フリートリッヒ二世（1194年～1250年）がイスラム勢力に備えてイタリア南部に築いた城塞の一つ、現在では世界遺産に登録されているカステル・デル・モンテが挙げられている（ヴィレ［12］25頁）。

タムスは非ナチス党員だったため、戦後（一時海外渡航は制限されたものの）公職追放を受けずにすみ、その後もデュッセドルフ市の都市計画責任者として精力的に活動を行い、1980年に同地で没する。

1972年には他ならないウィーンの工科大学が彼に名誉博士号を授与したが、そのときウィーンの或る建築家が、タムスの設計したウィーンの高射砲塔を挙げて、戦時中の彼の立場を強く批判したことをヴィレ（［12］44頁）は紹介している。タムス自身は生涯自分を（ナチス政策に積極的にコミットした技術者の弁明に典型的であるが）政党政治的あるいは道徳的な問題からは距離を取った純粋に機能的建築家であると見なしていたという。

さて大戦中高射砲塔はベルリンに３対、ハンブルクに２対、そしてウィーンに３対、計16基建設されたわけであるが、戦後それらはどうなったのだろうか。まずベルリンの３対は戦後まもなくすべて（ただしフンボルトハインのＧ塔だけは鉄道に近かったため半分残こされ、のちに植栽され展望台に

なった）連合軍の工兵隊による爆破を受けて解体除去された。壁面に沢山の穴をうがち、ダイナマイトを詰めて爆破するという方法である。またハンブルクの２対のうちＬ塔は年代には開きがあるものの、どちらも解体撤去、Ｇ塔のうちハイリゲンガイストフェルトの一つ（現存する唯一のタイプ１）は住宅密集地で爆破に問題があり、その後民間会社所有となり改造されメディアセンターとして使用されているが、ウィーンのアーレンベルク公園と同じタイプ２に属するヴィルヘルムスブルクにあるもう１基は軍事使用ができないよう内部空間を爆破されたまま建物だけが残っている。（両方とも興味ある読者は、グーグルマップを利用してハンブルク市の Wilhelmsbuerg、Heiligengeistfeld で検索してほしい。）

それに対してウィーンの６基は、戦後、取り壊されるでもなく、一部を除いて半ば放置されたまま立ち続けている。筆者はかつて、ウィーンの高射砲塔が撤去できないのは、３㍍前後の分厚い鉄筋コンクリートの壁が爆破不可能だからと聞いたことがあり、単純にそうかと思っていたのだが、ベルリン、ハンブルクでの先例がある以上、この理由は成り立たないであろう。

バウアー（[11] 18頁）によれば、その理由としてよく挙げられるのが次の二つであるという。一つは、過去の克服、非ナチス化を早急に徹底的に進めなければならなかったドイツでは、ナチスの軍事施設はすべて可及的速やかに撤去されねばならなかったのに対して、終戦当時、占領軍により「ナチスの被害者」（1938年にナチスドイツはオーストリアを「併合」した）と見なされたオーストリアでは、そうした施設をただちに撤去する緊急性はなかったのではというものである。（1958年には既にシュテイフト兵営のＧ塔が、主としてオーストリア軍の通信施設として使われており、これはドイツでは考えられないことだったであろう。）

もう一つは、ウィーンの高射砲塔は、ドイツの場合とは違い人口の非常に密集した地区に立っており、爆破による周囲の被害を懸念したためというものである。（現在の建物解体技術をもってすれば、近隣地域に影響を与えず解体撤去は可能であるという、ただし巨額の費用がかかるが。）

前者は当面爆破の緊急性はなかったというもの、後者は爆破しようとしたものの、技術的困難があったためであるというものである。筆者にはいずれが当たっているのか分からない。同じくバウアー（[11] 20頁）によれば、多大の労力と時間をかけて作られた高射砲塔の将来的活用、平和利用が敗戦直後からオーストリア側で問題となり様々なプランが提案されたが、それが爆破を引き延ばす結果をもたらしたようである。その後1955年、占領軍の撤退後、そうした再利用プランの緊急性もなくなり、かくして邪魔物を取り壊すべきか再利用すべきかの真剣な議論もなく、一部を除きそのまま放置されて今日に至ったというのが実情のようである。そうした、消極的放置、巨大な高射砲塔から警告の記念碑としての意味を読み取ろうとしない一般的な姿勢の背景には、やはり「オーストリアは被害者だった」という共通認識が働いていたのかもしれない。

なおウィーンのG塔の配置であるが、それが聖シュテファン大聖堂を中心とする三角形（アウガルテン－アーレンベルク間は約3.2キロ、アーレンベルク－シュティフト兵営間は約2.8キロ、シュティフト兵営－アウガルテン間は約３キロの不等辺三角形）の頂点であるという説は根拠がないという（バウアー [11] 36頁）。実際、色々な場所が候補地に挙がったというし、最終案では、当初決まっていた９区のロスアウアーカセルネに代わってアウガルテンが建築地となった。また初め現在シュティフト兵営のリンクよりにあるかつての帝室厩舎、現在のメッセパラストも候補地だったのが、地形が低すぎるためにより高いシュティフト兵営に決定されたという。いずれにしても場所選定にとって重要だったのは、建築資材運搬のための駅への近さだったことをバウアー（[11]92頁）もヴィレ（[12]40頁）も同じように指摘している。実際、アーレンベルクにはアスパング駅が、シュティフトカセルネは西駅、アウガルテンには北駅が近い。さらにアーレンベルクの高射砲塔建設に際してはドーナウ運河からヴァッサーガッセを経る軽便鉄道までが敷かれていたのである。

また設置場所がいずれも公園など公共施設であった点も見逃せないであろう。密集住宅を疎開することが困難であった以上、どうしても空き地のある

公園などに白羽の矢が立ったと思われる。住民の生命の保護という大義名分はあったわけであるが、結果として名だたる庭園（日本でいえば大名屋敷の庭園のようなもの）や公園、由緒ある建物群からなる兵営が本来の姿を失うこととなったわけである。

そこで、次に、ウィーンの高射砲塔設置場所になった庭園などについて少し触れておこう。

アウガルテン磁器工房やウィーン少年合唱団の宿舎で有名なアウガルテンについては色々解説書があるので割愛するが、エステルハージ公園、アーレンベルク公園等について簡単に触れておきたい。

まずエステルハージ公園について。７区を東西に走るマリアヒルファー通りは、西駅に向かった長いのぼり坂道であるが、アルザー段丘の続きの段丘の南東の縁を走っており、その南側の低地は地形学的にはウィーン川が刻んだ谷である。エステルハージ公園は、その南に面した緩やかな坂の途中、マリアヒルファー通り、およびこの通りと平行して走るグンペンドルファー通りの間に位置している。地下鉄Ｕ３でノイバウガッセ駅下車、地上に出たら、マリアヒルファーの大通りと交差するノイバウガッセと反対側アメルリング通りを南に下ればすぐである。この現在ではあまり変哲のない公園も、かつての貴族のパレ（御殿）の庭園（先述のように日本流にいえばさしずめ大名庭園）の名残である。

現在では姿を消してしまったウィーンのいくつかの御殿を扱った書、『失われたウィーン』（文献［15］）、「ウィーン・郷土史」シリーズの一冊『マリアヒルフ』（文献［16］）『ノイバウ』（文献［17］［18］）などに依拠しつつその歴史を簡単にたどってみよう。

現在のエステルハージ公園がその一部であった御殿は、1760年に、カウニッツがマリアヒルファー通りからウィーン川までの土地を購入して、以前の所有者の夏の別荘を大幅に改造し、増築したものである。カウニッツとは、優れた外交手腕でフランスとの同盟を締結し、オーストリアの国難を救い国威を高め、マリーア・テレージアの最重要の助言者、啓蒙の推進者、さらには

芸術の収集家かつ保護者として活躍した帝国宰相ヴェンツェル・カウニッツ－リートベルク伯爵（1711年～1794年）である。御殿は、高台から低地までを利用しており、カナレットの描く18世紀後半のこの地の風景画では、バルコンからの、下部の庭園さらにはその先のウィーン川の流れに至る眺めが描かれている。カウニッツ御殿は、貴重な絵画のコレクションでも有名だったという。彼の死の一年後ドイツからの亡命貴族がこの御殿を訪ね、カウニッツの孫娘に求婚し結婚する。のちのクレメンス・メッテルニッヒ侯爵である。

その後1812年までは御殿とその庭園はカウニッツの相続人が所有していたが、卸売り大商人ヤーコプ・レーヴェンタールの手を経て、最終的に外交官として名をはせた（また艶聞の絶えなかった）ニコラウス・エステルハージ侯爵がこの地所全部を買い取った。（ハイドンが楽長として長年使えたことでも知られるエステルハージ家はハンガリー、アイゼンシュタットの大地主、大貴族で、祖先はアッチラ大王［アッチラはドイツ語では Etzel］ともいわれているが、実際に歴史に登場するのは13世紀であり、近世以降ハープスブルク帝国で代々要職を勤めた。）侯の後継者のパウル･エステルハージ侯爵はこの御殿への関心を失い、1865年には自分の絵画ギャラリーをブタペストに移してしまう。そして1868年にウィーン市が買収し、ギムナジウムと地区の役所として建物を使用することになり、残された庭園も公園となった。1970年代にはギムナジウムも建て替えられて御殿の名残はほとんど失われてしまった。

次にアーレンベルク公園であるが、この公園は、３区にある。シュテファンプラッツから地下鉄Ｕ３でジンメリング方向に乗って三つ目のロフスガッセで下車、大通りであるラントシュトラッサー・ハウプトシュトラッッセをリンクと反対方向に進みヴァッサーガッセとの交差点を左折すると、すぐ公園、まずＬ塔が目に入るはずである。以下上掲の『失われたウィーン』（[15] 104頁以下）からこの公園の由来をかいつまんで紹介する。

この公園の起源は、上記カウニッツ御殿の買収者でもあったニコラウス･エステルハージ侯爵が、1785年に畑地を買い取り造らせた５万平方㍍の公園で

ある。彼はこの地に二階立ての簡素な夏の離宮を建てたが、1810年外国への長期滞在を機にこの不動産を売却する。

新しい所有者となったのは、フランツ皇帝の弟オーストリア大公カール（1771年～1847年）である。彼は軍人として軍制改革を行い、1809年、アウステリッツの戦いで総司令官としてナポレオン軍を破った。（１区の英雄広場にはオイゲン公の乗馬像と向かい合う形で彼の乗馬像が立っている。）同年ヴァグラムの戦いで敗れ、講和を急いだことやリベラルなものの見方が原因で、皇帝フランツとメッテルニッヒにより遠ざけられてしまう。以後、大公はこの地に移り住み、ウィーンでも有名となる大庭園を造らせ、そこに百種類以上のきれいで珍種のバラをイギリス、オランダから買い求め、植えさせたという。

この間、孤独な大公は戦争は国家と国民に起こりうる最大の悪であるとする意見を公表することとなり、これが再び皇帝フランツとメッテルニッヒの不興を買った。その後1815年ナポレオンのエルバ島脱出を機に、軍役に呼び戻されたが、大公は要塞司令官としてマインツに向かい、その地で王女アンリエッテ・フォン・ナッサウ－ヴァイルブルクに魅了された。大公はカトリックへの改宗を躊躇した彼女のためにバーデン近くのヘレネンタールに彼女の生まれた城と全く同じ部屋を配備した豪華なヴァイルブルク城を建てた。そのためウィーンの御殿は、大公には無用となり、高価なバラもヘレネンタールの城に移された。その後宮殿と庭園は、毛糸の取引で成功し財をなしたユダヤ系のハンガリー人ハインリッヒ・ザムエル・カースの手に移る。彼は自前の銀行を設立し、皇帝フランツから男爵の爵位を与えられた人物である。

さらにその後、公爵夫人ゾフィー・フォン・アーレンベルクがこの土地を獲得する。1900年にはウィーン市に所有が移る。庭園の周辺部は、住宅建築のために開発され、かつての庭園の残りの部分が、公共の公園となった。

「昔の宮殿は見栄えのしない二階建てとなり、その価値は知る人のみが知るものとなった。第二次世界大戦はかつては心地よかったこの地帯に二つのFlakturmのようなものをプレゼントした。そのとき貴族的な生活様式の息吹

は残らず消えてしまった。」（『失われたウィーン』［15］106頁）

1958年にはかつての宮殿も取り壊され、跡地に集合住宅が建設された。唯一往時を偲ばせるものとして残ったのはエステルハージ－侯爵時代の小さな東屋だという。

またシュティフト兵営は、主として DEHIO および文献[17]、[18]によれば、建築年代の異なるいずれも細長いトラクト（側翼）の複合体である。この建物は、1656年にフォン・カーオス男爵が、流行病の突発に際して学生を隔離するために土地を取得したのがその始まりである。その後、18世紀にモーザートラクト、貴族のための騎士アカデミーと乗馬学校が設けられたアカデミートラクト、ザプールトラクト、砲兵隊カセルネなどが次々と増設され、19世紀には今日のような外観になった。縦横約200㍍×240㍍ほどの長方形の土地を側翼が囲んでいる。その真ん中ややリンクよりのミッテルトラクトが中庭を二分しており、マリアヒルファ通りとシュティフトガッセの交差する角には1739年定礎のシュティフト教会がある。高射砲塔はその西側の中庭の奥手にカセルネの屋根を越えて聳えている。全体として城壁撤去後もとのグラシに造られたロスアウアーなどの近代の兵営と比べて、古風でどこか頼りない印象を受ける建物である。なおこのカセルネには、現在オーストリア連邦軍の国防アカデミーがあり、また最近までオーストリア国家公文書保管所の戦争史料部門が入っていたという。

今日、ウィーンの高射砲塔はすべて国もしくはウィーン市の財産として管理されている。そのうちのアーレンベルク公園のＧ塔の一部は、「応用芸術美術館」（（MAK）の現代芸術保管所として、シュテイフトカセルネのＧ塔は軍の通信施設および政府の緊急時防空壕および通信施設、エステルハージ公園のＬ塔は、1966年以来「海の家」（水族館）としてその外壁はオーストリアアルプス協会のクライミング練習場として公開されている。アウガルテン公園の２基は、どちらも民間会社DCV（ウィーン･データセンター）が賃貸してIT-データセンター設置を計画している。

三つのＧ塔のうち、シュテイフト兵営のそれは軍関係者以外立ち入り禁止のため、近よって見ることの出来るのは、アーレンベルク公園とアウガルテン公園の２基だけである。アーレンベルク公園の高射砲台は、直方体の上に円柱形の高射砲台のあるタイプ２のものであり、そのヴォリュームに圧倒されるというか、かなりの威圧感がある。ただしそれほど広くない公園の隅にあって、樹木の上に四角いビルがそびえているようにも見え、また公園では小さな子ども立ちが大声で駆け回ったりしていて、風景の一部となっているようでひどい違和感は持たなかった。それに対して周囲との不調和の著しいアウガルテンのＧ塔は、手入れの行き届いた花壇のある広い庭園の隅にあり、なおさら高く、なおさら不気味に見える。終戦直後、子供の火遊びの引火で下層の弾薬が爆破したためという大きな亀裂が屋上部分に走っており、打ちっ放しでコンクリートの木型の痕も残る側面は、鳩の糞や雨が作ったと思われる線状のシミ模様が何本も垂れていて、今にも襲いかかってくる傷ついた怪獣、あるいは逆に人間を寄せつけない巨人のようにも見えた。もうひとつエステルハージ公園のＴ塔は、「海の家」（水族館）として利用されているが、その中の狭く急な階段を上って、魚の泳ぐ青い水槽を見たとき、何となくほっとした気分になったことを思い出す。

ウィーンの未使用の高射砲塔についてはたとえば、先にあげたDCVによるアウガルテンの塔の再利用、またアーレンベルク公園のＴ塔を20世紀のオーストリアの歴史を総括する「（脱）歴史の家」（(H)aus der Geschichte）とする（詳しくはヴィレ［12］80頁以下）プラン等、様々な計画が持ち上がっているという。平和目的の再利用は結構なことであるが、とりわけ国が保有するアウガルテンの塔の DCV による IT-データセンター化の計画では、Ｇ塔の屋上には夜間は照明される三階建てガラス張りのラッパ型に開いた建物、外壁にはモダンなエレベーター塔を付け加えることが予定されている（ヴィレ［12］67頁には、その奇抜な模型の写真が載っている）。（連邦文化財保護局はこの計画を却下したが、その後、一転して文部科学省が許可、そこで計画実施と思われたものの、ウィーン市が文化財保護の対象であるこの公園の

土地の他目的転用を不認可、また住民の反対などで現在、計画はペンディング状態のようではある)。やはり筆者はあの外観だけは損ねてほしくないと思う。そうした改造は、あの塔をかえって醜悪化するだけでなく、おそらくあの塔のメッセージ性を大きく損ねてしまうであろうからである。

4. Laaer Wald und Böhmischer Prater
ラーの森とベーメン人のプラーター

ウィーン長期滞在中の生活に根ざした貴重な体験を綴った好エッセイ集(筆者もその恩恵にあずかった一人である)の中に、次のような一節があるのが気になった。

「プラターにはあの有名な大観覧車のある遊園地がある。この遊園地を、ヴルシュテル･プラター(道化役のプラター)とかボヘミアのプラターと呼ぶ。大観覧車は『第三の男』によってあまりにも有名だが、これ以外にも昔ながらの施設がまだある。それはリリパット・バーン(小人電車)で、遊園地の周りを回る小さな電車だ。現在50代の人も子供のころ乗ったことがある、というほど古いものだ。他のジェットコースターのようなけたたましいものとは違い、のんびりと周囲を走るだけ、というこの電車がまだあることが、いかにもウィーンの遊園地らしい。」(真鍋千絵『ふだん着のウィーン案内』晶文社190頁以下)

そして同じ頁に遊園地の写真が二枚あり、「『ボヘミアのプラター』と呼ばれる遊園地。どことなく鄙びた感じで、新旧さまざまな設備が雑然と同居している」というキャプションが付けられている。

一読してこれは変だな、と思った。２区のプラター公園(以下フォルクスプラーターと呼ぶ)の遊園地が「ボヘミアのプラター」と呼ばれているということは初耳だったし、たしか他の場所にボヘミアのプラーターがあったような気がした。

そこで調べてみると、やはりボヘミアのプラーターは別の場所10区(ファ

ヴォリーテン）にあることが分かった。それではと実際に出かけてみることにした。

なお以下、英語の「ボヘミア」ではなく、ドイツ語の「ベーメン」（Böhmen）を使用する。この言葉は紀元前この地域に居住しその後ローマの進出で移動していったケルト人のボイイ族（Boii、印欧語で「戦う人」が語源という）に由来する。同様に「モラヴィア」も英語読みであり、ドイツ語では「メーレン」（Mähren）である。またチェコ人（Tscheche）も使用する。ベーメン地方はチェコ語では Cechy でボヘミアとは言わない。また、メーレン地方は Morava（ウィーン旧市内の有名な書店の名前でもあるが）である。チェコ語辞典に記載されている bohemistika（チェコ学）、bohem（ボヘミアン）などは、ドイツ語からの借用であろう。ちなみに自由奔放な芸術家などを表すボヘミアンは、ベーメン人を指すフランス語の Boehm に由来するが、これはかつてボヘミアが流浪の民ジプシー（ロマ）の故郷と思われていたことによるという。

６月下旬の日曜日、空はどんよりとしていた。カールスプラッツから地下鉄Ｕ１に乗って４駅目、終点のロイマンプラッツで降りる。ここからは徒歩でラーアベルクシュトラーセを南東に向かう。少し進んで猛スピードで行き交う車の轟音が反響する片側三車線のアウトバーンの陸橋を越えてウルズラブルンネンガッセで左折、左手に家庭菜園らしきコッテジ群を見ながらしばらく行くと右手にボヘミアのプラーターの入り口が見える。スピーカーから流れるやや騒がしい歌をのぞけば、物静かな印象の遊園地である。遊具もフォルクスプラーターの比ではなく、座席が飛行機の形のメリーゴーランド、小さな観覧車など、そしてこぢんまりした料理店があるだけである。ただし昔日のフォルクスプラーターの遊園地のようなひなびた感じがあるともいわれる。しかもフォルクスプラーターのような喧噪もなければ、観光客もおらず、家族連れでゆっくり過ごすのには適当な場所であろう。実際、親子連れがそれぞれの遊具を楽しんでいる。ざっと眺めた最初の印象は、何だ、これだけのことなのかというものだった。

ところが奥まで進んで右手に木の柵と入り口があるのに気がついた。確か回転式の戸だったと思うが中に入る。その中は広葉樹林が茂っていて、木々の間を自然観察道がなめらかなカーブを描いて続いている。さらに進むと大きな池に出くわした。こんなところにと意外な気持ちがする。岸辺には水草が茂っていて、どこか寂しい雰囲気の池である。風が強く、柳の一種だろうか、葉の裏側の銀色が波立つように揺れ続けてまばゆい。引き返して南に進む。すると目の前に信じられないような光景が開けた。緑の草原がずっと南の方向へなだらかに傾斜して広がっている。一瞬、今ウィーンにいるのかという気持ちになって、とても新鮮な体験だった。この付近も風が強く、真っ白な花を付けたヴァイスドルンの枝がざわざわ音を発しながら揺れている。引き返してふたたび遊園地に戻る。

帰りは、レーヴェル・モーゼルガッセの陸橋を渡る。下の高速道路はあいかわらず激しい音である。この陸橋からは巨大なガスタンク群が（本稿５「ジンメリングのガゾメーター」参照）、さらにはかつて世界一の規模を持っていたというアンカーパン製造会社の煉瓦作りの古めかしい原料貯蔵塔がよく見えた。いずれにせよ『ふだん着のウィーン案内』の記述は思い違いだったようである。

この遊園地が属する10区（ファヴォリーテン）については「シュピンネリン・アム・クロイツ」の項を参照してもらうとして、まずこの一帯の地形である。少し巨視的に見ると、地図でも明らかなように、オーストリアの南西にそびえる東アルプスの山塊は、北東に向かって次第に高度をさげ、標高４～５百㍍のウィーンの森に姿を変えるが、ウィーンの近くで（陥没によるという）一旦途切れて、再び北のカルパチア山地へとつながってゆく。その峡谷部（「ウィーン門」）をドーナウ河が西から東にゆったりと抜けていく。パンノニア期には海が現在のウィーン近くまで入り込んでいたというが、その後、長い長い年月をかけて鮮新世代後期に海はウィーン盆地から後退して、氷期を迎える。氷期に太古のドーナウ河とその支流が、岸辺を削り、浸食した土砂、礫を大量にウィーンに運んだという。（坂口　文献（2）参照）

ウィーンは、地形学的には、そうした氷期に形成された礫層からなる多くの段丘が複雑に重なり合った都市である。先に見たヴィーナーベルク段丘もその一つであるが、ベーメンのプラーターと呼ばれる地域もラーアベルク Laaer Berg（ラー山）と呼ばれるラーアベルク段丘の平らな頂上付近にある。この段丘は山といってもヴィーナーベルク同様、礫層からなるドーナウ河の河岸段丘の一つであり（cf.「J.フィンク教授の説明ではシュメルツのラーエルベルク段丘の礫は明らかにドーナウ川のものであるという。とすれば、”ウィーンの門”･･･を通過したドーナウ川はウィーンの森の東縁を大きくまわりこみ、ラーエルベルク段丘をつくったのち東に移りながら、それ以下の段丘を形成していったという発達過程が考えられる。」坂口（2）91頁）、海抜256㍍ほど、ヴィーナーベルクより少し高く、ウィーンの南東部では最高峰（?）である。この段丘は西のヴィーナーベルク、更に西のシェーンブルンの高台と連続している。ラーアベルクの東側はレス（氷期の風成堆積物）からなり、ワインの栽培に適していてかつて栽培が行われていたが、19世紀60年代70年代にヨーロッパを襲ったブドウの木の天敵ブドウネアブラムシ（フィロキセラ）流行のため全滅したという。またこの地域には19世紀半ば一時期、軍の演習場も置かれたという。山の表面を覆う粘土層は後述するように煉瓦の材料として長年にわたり採掘され続けた。

また「ベーメンのプラーター」に隣接する緑地、筆者が入り込んだ一帯はラーア･ヴァルト Laaer Wald、「ラーの森」と呼ばれ、現在では柵で囲まれて犬や自転車をシャットアウトした面積39.6ヘクタールの自然公園となっている。ちなみにラー（古くは Laach）の名は中高ドイツ語の la=湿地、沼地によるという。

訪れた際に、説明のプレートをよく読んでおけばよかったのだが、その後になってラー山がウィーン市民に人気のハイキング地の一つであること、ラーの森が、実は植林による人工の森であること、また何故ベーメンのプラーターと呼ばれるのか、その名前の由来を知った。以下、主としてウィーンの緑地を紹介した『ウィーンの緑』（文献［20］）、ウィーンの移民問題の歴史、

現状、問題点を統計的史料に基づいて論じた『民族のるつぼ　ウィーン』（文献［21］　以下『るつぼ』と略記）、ラーベルク保護振興団体である「モンテ・ラー協会」と「ウィーン市の公式サイト」での紹介ページ等に依拠しつつラーヴァルトとベーメンのプラーターについて述べたい。

ほんのわずかながら高さでヴィーナーベルクを凌ぐラーアベルクは、18世紀後半以来皇室の狩猟場だったが、ヴィーナーベルク同様、昔から見晴らしのよさで知られていたという。筆者がラーの森を散策した際、南への眺望に驚いた付近は、この山（平坦な丘）の最高地点であり、そこはヨーゼフ二世が建てさせた園亭、ヨーゼフスルーエがあった場所だった。１でも触れた手元の1788年のウィーンの鳥瞰図（オプル『歴史的地図に見るウィーン像』第32図）の南東の郊外には、ラーア・ヴァルトとジンメリングヴァルトが描かれており、その中間の草地に丸く園亭が確認できるが、そこへとファヴォリーテン門から道が直接通じている。この建物は現存しないが（現在小さな物見台が造られている）、『ウィーンの緑』（［20］167頁）掲載の18世紀後半の銅版画に描かれているこの園亭を見ると、二階建てでたぶん八角形であろうか周りに360度パノラマを楽しめるベランダが張りめぐらされている。また啓蒙君主を自認したヨーゼフ二世は、この場所も市民に解放したためか、絵の中にはあるいは式典でもあったのか大勢の群衆が集まっている様子が描かれている。現在でも晴れた日には、フォアアルプス、アルプス、パンノニア平野の見晴らしを楽しむことができるという。おそらく遊園地のミニ観覧車に乗れば、かなりの眺望が期待できそうである。またこの一帯は筆者が訪れたときも風が強かったのだが、特に秋には風が強く、草原は凧あげの愛好家で賑わうそうである。

実は、ヴィーナーベルクも含めこの段丘地帯の地層は、先にもちょっと触れたように、煉瓦の原料となるインツェンスドルファー・テーゲル（泥灰岩）からなっており、昔から近くの煉瓦工場のためにさかんに採掘が行われてきた。後でも触れるが、19世紀後半は、ウィーンが大規模な都市改造の時代を迎えた時代であり、煉瓦の需要はとくに増加していた。筆者が見た人工的な

印象の池（「ブッター池」）は、やはり人工の池、つまり煉瓦の原料の採掘跡の窪地が池になったものだった。そうした池ができるほど採掘が行われたわけである。またこの池の他に、近くには「プァイヘン池」と呼ばれるひとまわり大きなもう一つ人工池が残されている。なおブッター池（ブッターは英語のバター）という名前の由来であるが、これはあくまで筆者の推測なのだが、煉瓦の製造工程と関係がありそうである（cf.煉瓦の原料とする粘土は、足踏みで柔らかくしたうえで「ブッターのように切りとられねばならなかった」『るつぼ』、［21］29頁）。「プァイフェン」の方は「笛」「たばこのパイプ」の意味である。白陶土を Pfeifenton というが、それと直接関係があるのかは分からない。

さて1880年代にこのラーアベルクの頂付近に、筆者には当時の規模は不明であるが、フォルクスプラーターに倣って遊園地が造られた。それが「ベーメンのプラーター」である。フォルクスプラーターよりももっと南、ベーメンにより遠いこの遊園地に「ベーメンの」という形容詞が付くのは、結局、煉瓦原料採掘や煉瓦作りを担った労働者のほとんどがベーメンからの出稼ぎ労働者だったことによる。

古くは13世紀後半、ベーメン王オトカールがウィーンを占領した時代、チェコ人のウィーン移住があったことが記録されている。またトルコ軍の撤退後、1531年に城塞の修理を担当したチェコ人の要塞建築親方ハンス・チェルトが、城塞強化工事のためにチェコ人をウィーンに引き連れたという。（『オーストリアのチェコ姓小辞典』［24］８頁参照）

『るつぼ』によれば、ベーメンとメーレンの南部（どちらもオーストリア国境に近い貧しい地域）からのウィーン移民は18世紀後半に始まり、1820年代に大規模化する。1820年には１万４千名弱だった国内（チェコは当時ハープスブルク帝国の一部だった）からのウィーン移住者は、1830年には約６倍に増え、推計では1851年には８万３千人のチェコ人がウィーンに居住していたという。（cf.「自由主義のもとで職業選択の自由と移住の自由が全面的に認められたのが、ボヘミア、モラヴィアや下オーストリア州の田舎からウィーン

市郊外へと労働人口が集中する制度的前提だった。」田口（3）76頁）発展を続けたウィーン（ウィーンの人口は1830年には約40万だったが、1880年には100万人を越え、1919年208万人でピークに達する）は帝国の都市の中でも最も人を引きつける都市だったのである。ウィーン市のチェコ人の数は、その後、1900年にピークを迎え51万８千余名（当時のウィーン市の人口の約４分の１）に達し、その後減少していく。

もちろんウィーンに移り住んだチェコ人の中にはフロイト（メーレンから）のように高等教育を受ける機会をもったものもあったが、19世紀前半にウィーンに住んだチェコ人の多くは、手工業の見習いとなったという。その後、彼らは家具職人、仕立て屋、靴職人などの分野で多数派を占めるほどになった。またベーメン･メーレン出身の女性の場合、1880年の統計では53251名中75%はサービス業（住宅の心配のない住み込みの召使いなど）に従事していたという。（『るつぼ』［21］19頁）ちなみにウィーン菓子（というよりもともとは Mehlspeise 穀物の粉で作った料理）の中でも素朴な感じの Buchteln（ ジャム･チーズ入り焼き菓子）、Dalken、（パンケーキの一種）、Powidl（すもものムース）等はチェコ由来のものである。これらをウィーンにもたらしたのが彼女たちだったのかは定かではないという。

このほかに建築現場などの季節労働者（としてウィーンにやってきたチェコ人も多かった。彼らはシーズン中働いて冬は故郷で過ごしたという。

以下は建築資材の運びの下働きをした季節労働のチェコ人たちについての記述の一部である。

「これらの人々は、その多くはベーメンの豊かではない地方からやってきたのだが、冬の間は普通ウィーンにはとどまらなかった。春になって復活祭ころ彼らは徒歩で小さなキャラバンを組んでウィーンに引かれてやってくる。父親と母親、それに色々な年齢のみすぼらしいなりの子供の一群が長い橋を渡って市内に足を入れる。」（『るつぼ』［21］28頁）

このチェコ人季節労働者の代表的な仕事が、上にも述べたように煉瓦作りだったのである。他にポーランド人、シュタイア人なども少数いたものの、

煉瓦工場の労働者のほとんどはベーメン出身（「煉瓦ベーメン人」）だった。有名なヴィーナーベルク煉瓦製造会社では1850年には2890名の労働者がいたが、19世紀の終わりには約６千名から８千名に達したという。（『るつぼ』［21］29頁）1857年の市壁取り壊しの勅令に基づく旧市の城壁撤去後、新設のリンク通りに沿って大規模な歴史的建造物が次々と造られたし（cf. ショースキー(8)『世紀末ウィーン』第二章「リングシュトラーセ　－その批判者と近代的都市計画の生誕」）、時代はいわゆる創業者時代（Gründerjahre：泡沫会社乱立時代という訳がある）で煉瓦の需要は非常に大きかったわけである。（cf.「1867年から73年までに、ライタ以西（ライタ川の西、つまりオーストリア・ハンガリー帝国のオーストリア側･･･筆者注）では『創業期』と呼ばれる株式会社の設立期をむかえた。この間に1000をこえる株式会社が設立され、その三分の二は工業部門に集中した。」南塚信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』(5) 228頁）ちなみにヴィーナーベルク煉瓦製造会社は、現在、海外に多数の工場を持つ世界でも屈指の煉瓦製造会社に成長しているが、その会社の歴史の一つのピークだったのは、やはり19世紀末のリンク周辺の改造時代だったという。

ところで『るつぼ』（［21］29頁）によれば、煉瓦作りの工程は、ただ原料を掘って型にして焼くというだけのものではなく、一旦掘り出した粘土をしばらく寝かせておいて、その後適当な柔らかさにするために水を張った穴に入れて、それを、場合によっては腹の深さまで水に漬かって、素足で踏みならすという労力のいる作業が必要だった。（このような形で毎日のように粘土に触れていたため、当時「ウィーン病」とも呼ばれた結核罹患者と並んで、リューマチ、関節炎などの職業病にかかるものもいた。また彼らは過酷な肉体労働のため、仕事が終わると強い火酒を入れたビールをよく飲んだという。）

また、煉瓦工場の労働時間の条件も劣悪で、1897年にやっと就労時間が定められたが、それは11時間以内とするものだった。この規則も厳密には守られなかったのである。また煉瓦労働者の中には女性もおり、彼女たちは足踏みで柔らかくなった粘土を切りとって型にはめ、並べて日干しにするという

仕事が与えられていたが、中には朝の６時から夕方の６時まで働きづめといった例が見られた。住宅事情も劣悪で、子供が外に寝かされるといったこともあったという。

こうした状態のなか、1888年にチェコ生まれの医師でありオーストリア社会民主主義運動の指導者であったヴィクトール・アードラーが、『平等』紙上に掲載したルポルタージュ「ボヘミアの煉瓦工」の中で、ボヘミアの労働者の劣悪な生活実態とヴィーナーベルク煉瓦会社による何重もの搾取を暴露する。このことがきっかけとなり、ファヴォリーテン地区では労働者の組織化がすすみ、1895年には建築ラッシュで巨万の富を築いた煉瓦成金に対して大規模なストを成功裡に打つことができたという。

当初チェコ人労働者は単純労働者だったし、ベーメン王国を目指すチェコ国民主義者とも無縁の存在であり、ウィーンのチェコ労働者の存在がプラハを中心とするチェコでは先鋭化してゆく「民族問題」（多民族国家であるオーストリアはつねにこの問題を抱えてきたわけであるが）を惹起するにはまだいたらなかったという（ユダヤ教徒への差別は周知のように中世からこの都市には厳然としてあったが）。ここで筆者は、当時のウィーン市民によるチェコ人への民族差別に関して触れる余裕も資格もない（詳しくは『るつぼ』参照）。参考までにドーデンの小辞典『オーストリアではどう言うか』（1969年第一版）記載の以下のようなオーストリアドイツ語の言い回しだけ挙げておこう。

Böhmak: これは特にウィーンで使われたベーメン人に対する蔑称という。

böhmakeln: これもウィーンで使われた軽蔑表現で「片言のドイツ語を話す」。

böhmisch einkaufen: 文字通りに読めば「ベーメン人的に買い物をする」であるが、意味は「盗む」である。小辞典では、この項に（引用符付きではあるが）新聞の用例が挙げてあり、その日付は1968年（！）のものである。なおこれらの記述は「完全改訂」第二版（1980年）でもそのままである。また古く1926年刊の『ウィーン方言辞典』（文献［23］）には böhmischer Grund

（Favoriten）という表現も収録されている。

周知のように1897年当時の首相バデーニは、困難な政治的状況の打開のためもあって、ベーメンとメーレンの役人にドイツ語とチェコ語の両言語の使用を義務づける言語令を発した。これはチェコ語を軽んじたドイツ語系オーストリア人には不利であり、逆にドイツ語習得に熱心だったチェコ人には有利だったため、ドイツ語系の猛反発を買い混乱のうちに、議会での異例の議事妨害に発展して撤回されることになった（cf. ジョンストン『ウィーン精神 I』(9) 69頁)。この例に見られるように役人を目指すたとえばプラハのチェコ人はドイツ語を自由にできたであろうが、ウィーンのベーメンの煉瓦工にはそうしたチャンスはもともとなく、böhmakeln とあざ笑われたのであろう。ちなみにオーストリア全土においてドイツ語を行政、教育における唯一の言語と定めたのはかの啓蒙君主ヨーゼフ二世である。むろんそのときも少数民族の反発を買い、むしろそれぞれの母語への自覚を高める結果となったというが。(多民族、多言語からなるハープスブルク帝国の多文化共存の試みについては、大津留の労作、『ハプスブルクの実験』文献(10)参照のこと。)

さて、煉瓦作りの労働を担ったベーメン人たちは、労働条件が幾分緩和され始める中で余暇を得るようになり、レストラン、回転木馬、射的小屋、ダンス場などのあるこの仕事場に近い遊園地を憩いの場として利用することとなる。この意味でこの遊園地は（「ボヘミアのプラター」、つまり）「ベーメンのプラーター」というよりも「ベーメン人のプラーター」と呼ぶのが適切なのかも知れない。昔から続く陶土採掘のため、既に以前からこの地域には樹木がほとんど無くなっていたという。そうした殺風景な環境の中で遠く故郷を離れて劣悪な条件下きつい労働を強いられていた「ベーメン人たち」のプラーターは砂漠の中のならぬ殺伐とした採鉱現場のオアシスのような役割を果たしたのだろうか。

このベーメン人のプラーターは、1945年４月終戦直前に大火のため灰燼に帰した。その後再興されることなく年月が経過する。筆者所有の1972年のウィーン市地図にも当然のことながら、ベーメン人のプラーターもラーの森

も載っていない。90年代になってやっと復活が始まる。筆者が見たのは復活したての遊園地だったようである。またラーの森の南続きには保養施設もつくられた。こうした動きの中、今日地元の有志により結成された「モンテ・ラー協会」が様々な催し物等の企画を行ってこの地域の振興に努力していることは力強いことである。（cf.「われわれ、クラブ・モンテ・ラーは、また法律の規定にもかなう登録団体であり、その役割とはベーメン人のプラーターの維持と再活性化にある。」機関誌『トララ』から）

ところで、先述のように現在の「ラーの森」一帯は、環境保護という観念の無かった時代とはいえ、煉瓦生産の原料の採掘のため幅広くしかも長い年月にわたって掘り返されたことや、燃料としての立木の伐採が行われたため、ずっと不毛地帯になっていた。『ウィーンの緑』では「何百年にもわたりずっと森がなかった」（[20] 169頁）と述べられているが、「何百年も」というのは誇張のようである。モンテ・ラー協会のサイトには以下のような説明がある。

「1788年の地図にはラーの森は『Laacher Waldl』と書かれている。ラーアベルクのオーク類の森はかつては今日のファヴォリテン通りまで広がっていて、19世紀の初めまでまだ皇帝フランツ・ヨーゼフ二世（これはマリーア・テレージアの長子ですでに亡くなっていたヨーゼフ二世ではなくフランツ二世であろう･･･筆者注）のお狩り場として利用されていた。19世紀の末にできたベーメン人のプラーターのあった地帯には綿毛オークの森が見える。ラーアベルクの森林伐採は18世紀、19世紀と続き、樹木の大部分がその犠牲となった。」（http://www.montelaa.biz/monte-laa-geschichte/item/21）（先にヨーゼフ二世の見晴らし台の箇所で挙げた筆者のもつ1778年の地図も上の説明で言及されているのと同じ地図だと思うが、現在のベーメン人のプラーター付近には樹木は描かれておらず、少し南側のまとまった森林が、Laach Waldl 表記されている）。ということで、やはり「何百年にわたって」はやや正確さを欠く表現かと思う。

さらに第二次大戦時には戦車のテスト場になって踏み荒らされたり、また

第二次大戦直後には、燃料不足のため残された森林ほとんどが伐採されてしまう。その結果ラーアベルクはつい五十年ほど前までは「裸の山」だったのである。(cf.「1945年には、ラーアベルクの頂上は二つの煉瓦池のある荒野同然となった。」モンテ・ラー協会のサイトより)

戦後しばらくしてウィーン市は市民の憩いの場を造るためにラーアの森の復活を企てる。ウィーン営林局による最初の試みは、この地域の不毛な土壌(礫層)、乾燥した気候、強風などに阻まれて、1953/4年に一旦挫折する。

その後大きなコストをかけて人工的灌漑、有機ゴミによる施肥などの土壌改良事業が進められ、1956年から64年にかけて27万本の植林（ほとんどが柏、なら、カエデなどの広葉樹である）が行われたという。この再造林の努力は、1980年代になって実を結び、1982年には、この一帯が「憩いの地　ラーアベルク」として一般に公開されるに至る。筆者が目にしたのは、すべてそうした努力によって再生した緑だったのである。２区のフォルクスプラーターは緑の豊かな場所としても知られている。今、ベーメン人のプラーターも再生した緑に囲まれて、名実ともに「プラーター」となったわけであるが、これが百年前だったらと思うと、あまりに遅きに失した感がぬぐえないような気がするのである。

5. Die Gasometer in Simmering　　ジメリングのガゾメーター群

これも一昔前の話である。この項で描写する建築物は、あとで触れるように大幅な再利用計画によって姿を一変してしまったので、あくまで、それ以前の建物に関してのアナクロニスティックな記述であることを断っておきたい。

ウィーンのシュヴェヒアート空港から市内に向かって左手遠くに褐色の壁のような建物群が見えた。その後気をつけて見てみると、プラーターの大観覧車の中からも見える。あれは何だろうかと思いながら分からないまま過ぎていった。あるときテレビニュースの催し物案内に、同じ建物群が出てきて、

ジンメリングのガゾメーター（ガスタンク）であることが分かった。展覧会の場所が、アパートのすぐ近くのメッセパラストだったので、すぐに出かけてみた。

会場ではこれらの建物の歴史を示すパネル、円柱形のミニチュア、さらに改造プロジェクトのプランの展示などが行われていた。地元の人たちはあまり関心がないのか、がらがらだったのが気になった。

建物の名前と場所が分かったので、足を運んでみることにした。シュテファンスプラッツから地下鉄Ｕ３でエルトベルク下車（当時はここが終点だった）。地図をたよりに、そして建物自体が高いのでその方向に進む。この先はウィーンガス会社、その先は電力会社と続き、人家はほとんど見あたらなくなる。途中 Franzosengraben という印象的な名前（案の定、ナポレオン戦争に関連する地名ということがあとで分かった）の通りに入り、ググルガッセで左折すると目に前に四基のガスタンクが、よく見ると２基ずつペアになって整列しているのが見える。とにかく大きい。それが四体もあるのだから、なおさらである（それぞれのタンクは、直径が約64㍍、内部の最大の高さは約72㍍あり、プラーターの大観覧車がすっぽり中に収まる規模である）。

屋根が緩やかなドームとなっているこの巨大な円筒の壁面はくすんだ褐色の化粧煉瓦張りである。高射砲塔とは異なり非常に装飾性に富んだデザインの外壁を持つ。最上部を取り巻く沢山の飾り窓を持った鋸壁を入れると四層に区切られている。一層目には入り口と二重窓、二層目にはアーチ状の窓、三層目はより小さな二重窓と沢山の窓が開いている。また一層目には水平方向に何本もの強調線が施され、上の層では二、三本が走り、アクセントをつけている。その壁面には窓と窓を挟んで、全部で18本の外に出っ張った扶壁風の支柱がこの建物を支えるかのように上に伸びている。本当はこの建物全体が Gasometer（字義通りにはガスメーター）なのではない。本来の計量は別のガスメーター棟で行われたのであるが、ぞれのタンクの一層目には直径２メートルを超える大時計のようなガス量を示す計器がついており（遠くからはよく見えないのだが、このメーターの上には双頭の鷲のワッペンがは

め込まれている）それが Gasometer の愛称を生んだのかも知れない。外装は、イギリスの後期産業化時代の施設がモデルというが、全体として、どこか中世のお城の城壁を思わせる重厚な作りであり19世紀後半の建築の思潮でもあった歴史主義の作品といわれている。歴史主義は、古代に範を取った新古典主義に対して、目的に応じて様々な時代の意匠を取り込んだため折衷主義ともいわれており、19世紀後半リンク通りに面して建てられた市役所、大学、議事堂などの大建造物の大半は歴史主義の建築の代表格である。またガスタンクも含めて、大規模建築が可能となった背景には、19世紀後半の製鉄技術の進歩による新しい鋼材（タンクのドームの鉄骨はそうした新しい素材によって組み立てられている）や工法の登場といった技術革新があったことも忘れてはならないだろう。（ちなみに哲学者ヴィトゲンシュタインの父親は、周知のように、ハープスブルク帝国内でも屈指の鉄鋼王で、かつて現在のアルゲンティニーアー通りには、「ヴィトゲンシュタイン御殿」と呼ばれる豪壮な邸宅があった。）

あとから知ったのであるが、実は、外から見える煉瓦造りの建物自体がガスタンクなのではない。鉄製のガスタンク本体は、煉瓦造りのいわば大きな容器の内部にすっぽり収まっており、高さ33.6㍍の釣り鐘型をしていて、気密性性を保つために３万立方㍍の水槽に漬かっている。このタンク本体は、直径約58㍍、59㍍、60㍍の相互にかみ合った同心の三つの円筒から出来ていて、それらが、別棟のガス炉によって生産されたガスを引き込むか供給のため排出するかに応じて、伸縮する望遠鏡のように内壁の18本の鉄製のスライダ柱に沿って上下する構造となっていた。外から見える18本の柱は、これらのスライダ装置に対応しているのである。このタンクはそれぞれ約９万立方㍍のガスを収容できたそうである。

当時は既に使用されておらず、立ち入り禁止の札が下がっていて中には入れなかった。そこでぐるりと一回りして、引き込み線であろうか線路を渡って戻ることにした。どこから飛んでくるのか分からないが、ガスタンクを背景にプラタナスの白い綿毛が無数に空中に舞い不思議な光景だった。

以下、主として「ウィーン経済振興基金」が発行した『ガゾメーター　ジッメリング　過去－現在－未来　再生プロジェクト』（文献［25］）に依拠しつつ、このガスタンクの歴史などを簡単に紹介しておこう。

これらのガスタンクのある第11区は地形学的にはプラーター段丘に乗っているが、その大半はドーナウ運河に面した沖積地である。この地区を南北に走る中心道路であるジンメリンガーハウプトシュトラーセの歴史は古く、ローマ時代出城であるヴィンドボナ（ウィーン）からカルヌントゥムへ向かうローマ街道の一部だったという。

ドーナウ運河、ラーアベルク東側とシュベヒアートに囲まれた地域は、昔からジンメリングハイデ（原野）と呼ばれているが、野菜栽培の盛んな田園地帯、ウィーン市内への野菜供給地として古くから知られている（すでに14世紀にSymoning の野菜園という記録があるという）。1874年に南の端に中央墓地が建設されて畑地の一部が失われたが、いまでも野菜供給組合が活動している。16世紀、17世紀の二回にわたるトルコ軍襲来の際は、この原野は、彼らのラクダのえさ場となったという。また1718年には総勢763名のお供を従えたトルコの初代大使の歓迎式典が行われたことも知られている。18世紀後半になると原野は帝国崩壊まで続く大砲射撃の演習場となる。さらにこの地では18世紀末から飛脚の競争大会が開かれたり、ウィーンで最初の航空機の飛行（1909年）が行われたりと、広大な空き地を利用しての催しが盛んだったようである。

19世紀末の産業化の進展に対応して、また以下に述べるようにエネルギー事業の公営化の線に沿って、この広大な空き地には、ガス、電気などのエネルギー供給施設、浄水場、廃棄物処理工場など市営の施設が次々に建設された。そのガス工場がジメリングのガスタンクを中心とする施設である。

歴史は19世紀初頭まで遡る。初期のガス需要は、主に街路照明と劇場の照明に限られており、ウィーンでは、1818年に旧市内で25基の街路燈は試験的に点されたのが始まりという。リンク通りのガス照明が始まるのは1865年である。この間、いくつかのガス会社が設立されるが、すべて私営の会社だった。特にイギリスの I.C.G.A（Imperial-Continental-Gas-Association）-が、経済的技

術的に勝っていたためウィーンのガス業界をほぼ支配していた。

ウィーン市は街路照明用ガスの供給のためこの会社と契約を結んでいたが、その契約の満期が、1899年10月31日となっていた。ウィーン市は70年代に自前のガス供給を検討し始めたのだが、その実現は90年代になってなされることとなる。

その背景には、契約更新での条件が折り合わなかったこともあるが、それまでの自由主義市政に対して1891年の議会選挙で圧勝し、1897年にウィーン市長となりキリスト教社会党の市政を推し進めたルエガーの「公の利益に関わる事柄は公の機関によって行われるべきだ」という都市経営の基本方針（実はこの方針はユダヤ系資本との戦いというシンボル的意味とも結びついていたというが）にあったといえよう。そして彼が市長となって最初に手がけたのが、ガス事業の市営化だったのである。ルエガーは、ガス工場の新設によるガス事業の市営化に続いて、交通網の市営化、市電用の発電所建設（ガスタンクの隣接地）、さらに一般利用向け発電所建設、上下水道の整備と、矢継ぎ早に公営化政策、建設事業を推進したのである。（cf. 田口（3）109頁）

そこで1892年の市議会の決定を受けて、国際コンペが行われ、ベルリンの技師シュミングが一位になった。翌年、ガス工場の建設が決定される。詳細なプロジェクトの策定を任されたのは技師テオドール･ヘルマンである。彼は、一つのガス工場による中央管理的なガス供給という新しいコンセプトを仕上げる。実際の建設はフランツ・カパウンの指揮下、ウィーン建設局が担当した。1899年の契約切れに間に合わせるために、工事には大勢の労働者が投入され、結局1899年10月25日にはガス施設の営業を開始できたという。（田口（3）では「予定通り99年10月31日から市営工場によるガス供給が開始され」111頁とある。）工場には「オーストリア･ハンガリー国有鉄道」（現東部線）が隣接しており、石炭の供給は容易に行われた。

第一次世界大戦時には労働力不足のため、戦争捕虜がかりだされたという。

ガス施設は第二次世界大戦中に損害を被ったものの、多くの費用をかけてすぐに再稼働にこぎつける。ところが1970年代に入り都市ガスがより経済効

率のよい天然ガスに置き換わることになり、これらのガスタンクは、そして同じように化粧煉瓦を施してある管理施設、ガス生産施設も役目を終えることとなる。1985年に１基が､翌年には残り３基が操業を停止した。その少し前、1981年に、四つのガスタンクは、その歴史的産業記念物として文化財保護法の適用を受けた。

その後これらのタンクは、音響効果がいいといったことで散発的にコンサートホールとして使われたりしたが､1991年に付属の建物も含めて、ウィーン経済振興基金が買い取り、1995年には、再利用計画実施が決定（当時筆者がのぞいた展覧会は、その広報イベントの一環だった）された。

筆者は、まだガゾメーターシティに足を運んだことがないので、以下、ザルニッツ著『ウィーン　1975年－2005年　新しい建築』（文献［26］120頁以下）の記述などによれば、四つの旧ガゾメーターの外壁は残したうえで、著名な建築家（グループ）のデザインによる集合住宅（約620世帯）､学生寮､ショッピングセンター、4200名収容の防音性の高い大ホール、ウィーン市の公文書保管庫などの建設が進められ、各々のタンクがそれぞれ独自に改築された。タンクのドーム屋根の透明化、内壁を一周する形あるいは中心から三方に伸びるＹ字形の近代的な集合住宅の建設、外部への盾状の住宅棟の付設（Ｂ棟のみ）、四つのタンクの商店街モールによる結合等によって、（どれだけの費用がかかったのかは筆者には不明であるが）ジンメリングのガゾメーター群は、建築からほぼ百年後「ガゾメーターシティ」（当初はＧ－タウン）に大きく変貌し生まれ変わったのである。また地下鉄Ｕ３もシティを経てジンメリングまで延伸され交通の便は格段によくなり、周囲は活性化してきているという。（変貌した姿等については、ガゾメーター・シティの公式サイト www.gasometer.at を参照してほしい。）

さて市が主体となって実現したこうした新しい光景を、タンクの生みの親ともいえるルエガーが目にしたとしたら、果たしてどのように思ったであろうか。まだ実際にガゾメーター･シティを目にしたことのない筆者個人のとり

あえずの感想ないし感慨としては、あのまま四つのタンクが手つかずで四人兄弟仲良く（？）並んだままで残っていてほしかったと思うのだが、高射砲塔のような問題もなく、外壁・外観（外の盾型建築には抵抗感があるが）は残して地域の大きな活性化を実現したという点では改造も結果としては是とされるのかもしれない。ただせめて１基だけでも、ガスタンク本体などの設備を解体することなく、ガス貯蔵のメカニズムの分かる産業遺産として残しておいてほしかったというのが本当の気持ちである。

【引用文献および参照文献　独語】

[1] Otto R.Croy,Josef Haslinger :Leben in der Asche Trümmerjahre in Wien 1945-1948 Kremayr & Scheriau, Wien 1993

[2] Adalbert Klaa :Die Siedlungsformen Wiens Paul Zsolnay, Wien-Hamburg 1971

[3] Carola Leitner,Fabian Burstein :Wiener Plätze und Nebenschauplätze Metroverlag, Wien 2008

[4] Ferdinand Opll :Wien im Bild historischer Karten Böhlau, Wien1983

[5] Friedrich Dahm,Manfred Koller : Die Wiener Spinnerin am Kreuz Franz Deuticke, Wien 1991

[6] Rupert Feuchtmüller :Der Wiener Stephansdom Wiener Dom-Verlag, Wien 1978

[7] Reclams Kunstführer Österreich Bd.1, Stuttgart 1961

[8] Heimito von Doderer :Die Strudlhofstiege Ungekürzte Ausgabe Deutscher Taschenbuch Verlag, München 1980（1 Aufl. 1951 BiedersteinVerlag）

[9] Stefan Winterstein（Hrsg）:Die Strudlhofstiege Biographie eines Schauplatzes Bibliophile Edition, Wien 2010

[10] Helmut Nemec,Gottfried Mraz :Belvedere Schloß und Park des

Prinzen Eugen Herder, Wien/Freiburg-Basel 1988

[11] Ute Bauer :Die Wiener Flaktürme im Spiegel österreichischer Erinnerungskultur Phoibos Verlag, Wien 2003

[12] Valentin E.Wille :Die Flaktürme in Wien, Berlin und Hamburg Verlag Dr.Müller, Saarbrücken 2008

[13] Michael Foedrowitz :Die Flaktürme in Berlin, Hamburg und Wien 1940-1950 Podzun-Pallas-Verlag, Wölfersheim-Berstadt 1996

[14] Duncan J.D.Smith :Nur in Wien 6.Aufl. Christian Brandstätter, Wien 2010

[15] Edgard Haider :Verlorenes Wien Adelpalaste vergangener Tage Böhlau, Wien 1984

[16] Helmut Kretschmer : Mariahilf Jugend und Volk Edition, Wien 1992

[17] Elfriede Faber : Neubau Jugend und Volk Edition, Wien1995

[18] Wolfgang Mayer : VII・Neubau Jugend und Volk Verlag, Wien1983

[19] Wolfgang Kraus,Peter Müller :Wiener Palais Blankenstein, Wien 1991

[20] Maria Auböck,Gisa Ruland :Grün in Wien Falter Verlag, Wien 1994

[21] Michaek John,Albert Lichtblau :Schmerztiegel Wien Einst und jetz 2.verb.Auflage Böhlau, Wien 1993

[22a] Jakob Ebner : Wie sagt man in Österreich? Duden Verlag, Mannheim/Wien/Zürich 1969

[22b] Jakob Ebner : Wie sagt man in Österreich? 2.Aufl. Duden Verlag, Mannheim-Leipzig-Wien-Zürich 1980

[23] Julius Jakob: Wörterbuch des Wiener Dialektes Nachdruck der Ausgabe von 1929 Harenberg, Dortmund 1980

[24] Rudolf Simek,Stanislav Mikulasek : Kleines Lexikon der tschechischen Familiennamen in Österreich ÖBV Pädagogischer Verlag, Wien 1995

[25] Wiener Wirtschaftsförderngsfonds : Gasometer Simmering gestern-heute-morgen Ein Revitalisierungsprojekt, Wien 1995

［26］ August Sarnitz : Wien 1975 - 2005 Neue Architektur Springer Verlag, Wien 2003

【引用文献および参照文献　邦語】

本文で言及した主なもののみを挙げる。

(1) 阿部　謹也 「刑吏の社会史」『阿部謹也著作集』第二巻所収　筑摩書房 1999年 （初出　中公新書『刑吏の社会史』1977年）

(2) 坂口　豊『ウィーンと東アルプス』古今書院　1973年

(3) 田口　晃『ウィーン　都市の近代』岩波書店　2008年

(4) ハインリッヒ・プレティヒャ　関楠生訳『中世への旅』白水社 2002年

(5) 南塚　信吾編『ドナウ・ヨーロッパ史』 山川出版社　1999年

(6) G．ジンメル 酒田健一訳「橋と扉」『ジンメル著作集12』白水社　1994年

(7) 村山　雅人「ハイミート・フォン・ドーデラー　小説『シュトルードルホーフ階段』 －Menschwerdung（人間化）における「発展」とは－」『山梨医大』紀要第１巻、58-66　1984年

(8) カール．E、ショースキー　安井琢磨訳『世紀末ウィーン　－政治と文化－』岩波書店　1983年

(9) W.M.ジョンストン 井上修一他訳『ウィーン精神　Ⅰ　Ⅱ』 みすず書房 1986年

(10) 大津留　厚『ハプスブルクの実験　多文化共存をめざして』中央公論社 1995年

【参考文献】

本稿執筆時に参照したもののみを挙げる。

1. DEHIO WIEN I.Bezirk - Innere Stadt Verlag Berger-Horn, Wien 2007

2. DEHIO WIEN II.bis IX. und XX.Bezirk Verlag Anton Schroll＆Co, Wien 1993

3. DEHIO WIEN X.bis XIX. und XXI.Bezrik Verlag Berger-Horn, Wien 1996

（DEHIO は、ドイツの芸術史家 Georg Dehio（1850－1932）が著した5巻の美術記念物ハンドブックに範を取ったドイツ･オーストリアの美術記念物を中心に解説した浩瀚で有用なハンドブックシリーズである。有名な建物だけでなく、〇〇通りの何番地にかくかくの文化財がありといった細かな記述が特色であるが、その反面、一冊に多くの情報を詰め込もうとしているために簡略すぎるきらいがあると思う。）

4. Hrsg.von Richard und Maria Bamberger u.a. : Österreich Lexikon 2Bd. Verlaggemeinschaft Österreich-Lexikon, Wien 1995
5. Isabella Ackerl : Die Chronik Wiens Chronik Verlag, Dortmund 1988
6. Erwin Schmidt : Die Geschichte der Stadt Wien Jugend und Volk, Wien München 1978
7. Freytag-Berndt : Führer durch Wien und Umgebung 4.Aufl. Freytag-Berndt u. Artaria, Wien 1967
8. freytag-Berndt u. Artaria : Grosser Buchplan, Wien 1972
9. feytag & berndt :Buchplan Wien Freytag-Berndt u. Artaria, Wien 1995
10. Euro-Grossraumstadtatlas Wien RV Verlag, Berln 1993
11. Karl Baedeker :Wien und Umgebung Stadtführer Karl Baedeker, Freiburg 1979
12. Baedeckers Allianz-Taschenbücher Wien 2.Aufl. Baedecker, Stuttgart Wien
13. Gabrielle Praschl-Bichler：Wien Architektur des Barok Christian Brandstätter, Wien 1990
14. Magistrat der Stadt Wien: Archtektur in Wien 4.Aufl., Wien 1995
15. Peter Simbrunner : Wien Straßennamen von A bis Z Ueberreuter, Wien 1989
16. Felix Czeike :Wien Kunst & Kultur-Lexikon Süddeutscher Verlag, München

17. Felix Czeike : IV・Wieden Jugend und Volk Verlag, Wien 1979
18. Hans Renner u.a.: Der Prater Jugend und Volk, Wien München 1874
19. Hersg.v.FALTER : Anders reisen Wien Rowohlt, Reinbek bei Hamburg 1994
20. Gerhard Roth: Eine Reise in das Innere von Wien Fischer, Frankfurt a.Main 1994
（邦訳　『ウィーンの内部への旅』須永恒雄訳　彩流社　2000年）
21. Kleines Wörterbuch der Architektur Reclam Wissen 3.Aufl. Philipp Reclam jun. Stuttgart 1996
22. Winfred Koch :Baustilkunde Bd.1 Bd.2 Bertelsmann Lexikon Verlag, Gütersloh 1993
23. Salomon Kleiner :Das florierende Wien Vedutenwerk in vier Teilen aus den Jahren 1724-57 Harenberg, Dortmund 1979
24. Carl Schütz,Johan Ziegler u.a.: Die Wiener Ansichten　Die wiener Straßenbilder des Rokoko　Harenberg, Dortmund 1981
25. Das Pittoreske Wien　Edition Winkler-Hermaden, Schleinbach 2010

図１　シュピンネリン・アム・クロイツからのウィーン眺望
（１８５０年頃）

写真１　シュピンネリン・アム・
クロイツ

写真２　冬のシュトルードルホーフ階段

写真３　同階段　傾斜路

写真４　アウガルテンのＧ塔（タイプ３）

写真５　アウガルテンのＴ塔

写真６　アーレンベルクのＧ塔
（タイプ２）

写真７　ラーの森の自然観察道

写真８　ラーの森のブッター池

写真９　ラーの森から南方の眺望

写真 10　かつてのガゾメーター（1）（遠望）

写真 11　ガゾメーター（2）

写真 12　ガゾメーター（3）

写真 13　ガス量表示器（左手）

（写真はすべて筆者による。）